

第八號

文明之母第八號目次

文明之母

熱海の浴場

論說

繪畫博覽會論……ハリソン

日本男子品行論……清水豐子

家政

衛生育兒法（晉養）……関場不二彦

文藝

近詠十六首……佐々木光子

大宮公園に遊ふ記……佐々木信綱

不思議の再會……山陰樵夫

小說

水仙花……鐵筆將軍

劣夫傑女譚……山縣悌三郎

批評

皇朝記事文の批評を讀む……五溪山人

新著百種の「堀出しもの」……鐵筆將軍

南翠外史の殺人犯○智識

寄書

フオスカー婦人の傳……陵北女史

佛國におけろ婚姻……石渡宗一

雜報

皇后陛下の御誕辰○改良改良又改良○新奇なる鳥羽繪○情の居處○女生徒の品行○又○又○衣物改め

本誌は毎月一回（十五日）に發行す
本誌は前金に非れば發送せず
本誌の定價は（府外は郵稅を要す）

一冊	金八錢	
六冊半年分	金四十五錢	（郵稅共）金五十七錢
十二冊壹年分	金八十四錢	金壹圓八錢

郵稅 金拾錢（一冊の定價の項）

本誌の廣告料は（五號活字廿字詰）

一行	前金拾錢
廿行以上	前金八錢
十行以上	前金九錢
一頁以上	前金六錢

本誌の見本は郵券拾錢を送らるれば呈す
本誌の代金御回送の節は內國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度
郵券代用は一割增
本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送をへし然るも尚御回送無之節は直に發送を止むべし

版權所有

發行兼編輯人 中村一　東京深川區東町十三番地

印刷人 小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社

紫式部肖像



文明之母第八號

明治二十二年六月十五日發兌

文明之母

○熱海の浴場

「面海負山成二別郷一雨奇晴好富二風光一」しかのみならず、一脉靈泉の湧き出づるあつて、能く死を生し骨に肉す、實に瀛洲と雖も、天園と雖も、いかでか之に過ぎじと思へるゝは、豈に伊豆の熱海にあらずや。宜なるかな、此處に遊ぶもの四時絶えず、多きときには三千を過ぎ、最も少なき時と雖も尚ほ七八百に下らざるなりと。吾人も此頃近縣漫遊を思ひ立ち、遍く相豆の山河を跋渉し、竟に此の靈地に到り、三週間ほども滯留して、宿痾を養ひつゝありたりし。然り而して其間平生の奇癖を以て、鋭意熱心、未ざ人の觀ざる處のものを觀、未だ人の聞かざる處のものを聞き、いまだ人の氣付かざる處のものを氣付けたりしが、豈に圖らんや——容易ならざる事實を發見せり。吾人は已に之を發見し、乃ち大聲疾呼して言はんとす、良家の婦人をして——特に妙齡の婦人をして決して熱海に遊ばしむべからずと、假令一二の看守者あるにもせよ、決して熱海には行かしむべからずと、熱海は實に婦人には大毒あるの地なりと。

元来人の精神なるものは、其の目に見、耳に聞く所の感情によりて、如何様にも變ぜるものなり。心腸常に鐵の如くに堅き者も、其の見聞する所に依りては、乃ち感情の如何に依りては、忽ち蠟の如くに輭かなるに至るべきこと、固より言ふまでにもあらず。故に如何なる者にても、其の幼稚の時、若しくは少壯の際に於ては、極めて純潔なる事物を見聞し、極めて純潔なる感情を與へ、極めて純潔なる習慣を養成し、以て極めて純潔なる性質を形造らざるべからず。　然り而して純潔なる事物を見聞せんとするには先づ第一に純潔なる境遇を擇ばざるべからず、境遇は實に習慣の基礎――善の因て生ずるの源泉なり。惡の因て發するの根本なり。　見よ、ナポレオン豪邁の氣象は、已にカルシカに在るの時、其の幽鬱の風色にて之を養了せしにあらずや、又見よナイチンゲールの親切にして且英偉なるの精神は、早くも其のリー、ハーストに在るの際、静閑なる景物にて之を養成せしにあらずや、最も近くして最も曉り易き例を引かば、實に孟母の三遷！　偖熱海は果して如何なる處ぞ、吾人は右の論理に依りて、聊か左に論ずる所あらん。

蓋し熱海の地たる淫猥の空氣を以て充ちつゝあるなり　之を證せんか、大抵の家にては大抵春畫を藏せざるとなきなり、　半夜壯少年が街路に謡ふの歌は卑俚實に聞くに堪えざるなり、寄席などに於て演ずる凡ての所作事は猥褻眞に言ふに忍びざるなり、而

して臨監の警官も決して之を制せざるなり、甚しきに至つては、中等以下の人物にして不義の媒妁を爲すもの往々之れあり。吾人が滯在中の事なりしが、東京の者にして、年は二八の二九からぬてふ一貴女、其の母なる人と與に熱海に來遊しつゝありたりしが、當時遊客中の最も美人と呼ばれしものなり、而して彼女の一たび窓を開いて半身を現はすや、恰も慘憺たる黒雲に久しく掩はれたる明月が、纔かに雲間より微光を洩せしを拜むが如く、此處の樓下、彼處の屋上より、數多の嫩少年が、或は拍手し、或は喝采し、其の意を得んと欲するものゝ如し、吾人は之を觀て、窃かに其の可笑さに堪えかね、又其の無狀に驚きたりき。而して尚ほ聞く所に依れば、其の貴女なるものは、なかなか容易ならざる代物にして、母の眼を窃んで業已に不淨界に墮落しつゝありたるなり、又其の情夫は如何なるものといふに……實に驚くに堪えたり……彼地の菓子屋職人なりき。吾人之を聞て少しく疑ふ、如何に夕立すればとて少年の檐下に雨宿するを望む妙齡の婦人なればとて、苟もレデーと呼ばるゝ位にして、菓子屋職人などゝ相昵るゝことあらんやと。然れども是れは又仔細あることにて、始め數人の媒妁者あり、非常に周旋盡力する所ありたるなり。而して尚ほ熟考すれば、實に無理ならぬ話、彼の女も彼地に至りて定めて淫褻の寄席にも往きしことならん、淫褻の所作をも觀たることならん、淫褻の書籍を目にし

たることならん、淫褻の卑歌をも耳にしたることならん、乃ち彼の女の感情は多少淫褻を以て形づくられしことならん、其の機に會して、黄金の爲に働く多欲獸——不義嫉妬者の頻に斡旋するあり、嗚呼一朝(一夕か)其の不淨界に墜落し去りたる、敢て怪しむに足らざるなり、又決して深く咎むるに足らざるなり。吾人は信ず、此の貴女にして如何に無教育ならしむるも、如何に御轉婆ならしむるも、常に潔白なる境遇に在らしめ、常に潔白なる事物を見聞せしめば、必ずしも決して彼の如くに身を誤まらざるべきを。噫。

或人は必らず言はんか、成程熱海は厭ふべき淫褻の地なり、妙齢の婦人をして決して遊ばしむべからざるの地なり、然れども確乎たる看守者をして之と與に在らしめば、未だ左程にまでも憂ふるにも足らざるべし、彼の一貴女の身を誤りしが如きは、其の罪實は母親——看守乃任にあるの母親にありと言はざるべからずと。成程一應尤もなる意見の如くにぞある、然れども是れ看守の目的看守の效益、及び人情の微妙を解せざるの説のみ。抑も看守の目的は何處にありといはゞ、實に未だ墮落せざる者をして、常に墮落せざるの處に置かんとするにあるなり、將に墮落せんとする者をして、墮落せざる樣、勉むるにあらざるなり◎ 隨つて其效益も亦た前者にありては殊に顯著なるべく、後者に於ては必らず曖昧——或は決して畫餅に歸せずといふ可からず、否概

ねば畫餅に歸し了るべきのみ。且つ又人情なるものは、固より言ふべからざる、測るべからざる、窺ふ可らざる一種の不可思議物なり。看守者の眼中、如何に顯微鏡を具ふるも、看守者の胸裏、如何に照魔鏡を藏するも、何ぞ他の不可思議なる情の馳する處を看破するを得んや。諺に箱入娘にも蟲が生くといふが、實に能く穿ちたるものといふ可し、吾人豈又他を謂はん。兎に角、吾人が、妙齡の婦人をば假令一二の看守者あるにもせよ、決して熱海に行かしむ可からずと放言する、豈徒爾ならんや、豈偶然ならんや

少年少女をして、決して十六世紀の稗史、及ゾーラノ小說を讀ましむべからず、又決して69の招牌と觀せしむ可からずとは、泰西敎育家の稱道ける所なり。少年少女をして、梅ごよみ、及金瓶梅の如き著作を讀ましむべからず、又決して猥褻なる寄席、猥褻なる演劇に近づかしむ可からずとは、近頃我邦有識者の論述する所なり。これ他なし、其猥褻なる事物を見聞し、猥褻なる感情を惹起し、猥褻なる習慣と養成し、猥褻厭ふべき性質を形造るを恐るればなり。然りと雖も、厭ふべき猥褻なる性質を形づくる、豈書籍のみならんや、豈に招牌のみならんや、豈に寄席と演劇とのみならんや、吾人が前已に論したる境遇……實に是等よりも甚しきものあるなり、否是等のもの丶如きは、其境遇を組織する一分子たるに過ぎざるなり。　嗚呼熱海なる境遇に就き、讀者は已に厭棄し去り

たちかに知らざれども、請ふ吾人をして再び繰返すを得せしめよ。成程熱海は山水の風光には富めり、然れ共又淫猥の空氣を以て充ち滿てり、成程其の温暖なる天候は不健康なる人にに適すべし、然れども又少年少女の心膽をも攪亂すべし。成程其の靈泉は能く死者をも生かすを可し、然れども又少年少女を殺す(側面の意味より)べし。

吾人之を聞く、ドクトル、ベルツ氏は彼地に遊んで、生理上有益なる發見を爲したりと、又之を聞く、井上圓了氏は彼地に在りて、夢に就て數多の論據を得たりと、又聞く、數多の詩人歌人は彼地に到りて、靈妙快活の詩歌を獲たりと。吾人は實に彼地にありて、一も人に稱せらるゝの事を爲し得ざりき、是心中窃かに大に耻づる所なり。然れども又前述の事實は獨り吾人が爲し得ざる大發見なりとして、之を世人に告白すると同時に、少しく誇らざるを得ざるなり。兎に角吾人は將に來らんとするの炎帝は、必らず其の威力を逞ふして、我が數多の淑女と彼地に驅るべきを信ずるを以て、之を言ふや甚だくどし。

論説

○繪畫博覽會論

接前號

哲學士　フレデリツク、ハリソン

新奇の題目を描かんと試むる近代の作物は、巴黎の巧藝館に於て大抵之を觀るを得べし。世に佛蘭西様なる流派ありと妄想するものあれども、實際此の如き流派はなし。今巧藝館所陳の畫幅を觀るに、其類總て五十種、皆各文明國の畫師が所作にして、其標準の相異なる啻に涇渭のみならず、狂妄なるあり、放恣なるあり、輕剽なるあり、巧拙相接し妍蚩相雜る。凡そ繪畫の仁惠、感激、想像、柔和、殘忍、放逸、粗暴、破廉恥、愚戯等の理想を發揮したるもの、雜然駢列して、技を獻し巧を争ふ、其狀極て亂雜なり。汚穢や、疾病や、死亡や、殺戮や、苦痛や、解剖室、診察室、画室、換衣室、後巷暗渠等の内幕や、端正自尊のために隱蔽されたる秘密や、畫師の以て興思を寄する所のものにして、畫師も巍々然として一様に之を咏嘆し、憑沸して止まず。此の如くにして畫師各其伎倆を競ひ、其手法に依りて揮洒し、其題目を撰擇し、其傳へんと欲する所を傳ふ、而して其結果は則ち亂雜なり、想ふに此等の大畫幅は、單にヘール石鹼會社等の主義とする所を主義として作られたるものにして、之を繪畫と謂はんよりは、寧ろ一大招牌の、世にテル氏と云へるが如き畫師ありて、汎く四方君子の需に應ずるを廣告するものと謂ふべし。此の如き拙畫は何人も之を購求するを欲せざるべし、況や之を與に老ゆるに於ておや而して其畫愈拙劣なれば、觀る者も亦益呆然たらざるを得ず。

同館所陳の畫は皆耻を紙緗に載たるものなり。而して其最も甚しきものは、第千五百六十四號のレフェヴル氏作狂人の圖なり。其圖一室と畫く、其戸扃は損破し、其家財は紛

碎せられ、緩爐、鏡、椅子、磁器の屬狼籍として内に充つ、亂暴を經たるもの、如く然り、一狂人あり襯衣のまゝ一卓上に坐し、唇を開き歯を露し笑ふが如く又嘲けるが如し、其脚下に狀貌極て鄙陋なる一婦人の死體の横はるあり、其衣は破れて完處なく、鮮血淋漓、四面に溢る、是此圖の大槩なり。假令此畫をして生氣勃々、人に逼るの力あらしむるも、尚ほ厭惡すべし、然るを况や其之なきに於てをや。凡そ畫師の此の如く狂人の兇狀を真寫して、乾燥無味粗本なるは、極めて不可なり、ゾーラ(佛國小説の名家)主義は之を畫事に適用すべからず、一たび之を適用せば終に其弊に堪へざるに至らん夫の詩歌小説の如きは、假令殘忍の行爲を寫すも、繪画の如く直に人目に觸れず、且つ我自ら求めざれば、之を讀むの必要無し、唯繪畫は然らず、故にゾーラ主義を紙絹に載せて、之を衆目に觸れしむるものは、文化の罪人なり。苟も禮節を重んずるものは、皷を鳴らして之を攻むるも可なり。

第千三百五十五號ジヤマン作「石時代の強姦の圖」に至りては、我々又何をか言はん。一男子の躶體なるものあり、狀貌醜なるポリフェマスに肖たり、將に躶體の一少女を拘引し去らんとす、少女は即ち石時代の婦人を寫したるものなりと云ふ、少女怒りて其拇指を以てポリフェマスの右眼を撞き、將に其眼球を刳出せんとす、ポリフェマス痛苦に堪へず、叫喚の間少女を抱緊して其肋骨を粉碎せんとす、是に於てか少女も亦苦惱し、且つ叫喚す、乙のポリフェマスあり蓋しマルチン致命者の亞流なり、會此處を過ぎる、乃ち背後より惡棍を捉へて之を縊殺せんとす、是此圖の大概なり。嗚呼此畫幅を購ひ、日々喫飯

の際、后時代の男女の叫喚の聲を無聲に聞くものあらむ、吾人は此の如き人を呼びて、人間の最も不幸なる者と言はんとす。

又死亡、疾病、淫佚を題目として、之を乾燥無味鄙俗の筆を以て直寫し、以て興思を寄するものあり。其畫く所、死體の竝横はるもの數十、燭臺數基、花環數箇、繻子の枕數箇、醫師の少女の胸を掩へるもの一人、但し少女は衣服を襲けざるが故に、頗る觀るに堪へざるものあり。其他凡そゾーラの書は筆する所のものは、悉く描寫して剩す所なし。又一畫あり、其畫く所頗る索寞の觀あり、蓋し多少腕力あり、熟練ある畫師の手に成りたるものゝ、此圖は病院午後の實況なり、一群の婦人ありて、粗造の長榻に坐す、診察輪番の到るを竢つものゝ如く然り、其顏色と形容とを窺へば、直に其某々の患者たるを知るべし、皆忙然として失ふ所あるか如く、焦然として生を樂しむの意なきが如く、枯木の如く、又死灰の如し、皆生氣なく、情味なく、婉美快活の所なし、故に人を動すの力も亦之あるなし唯惘々然として群坐するのみ、唯此の如きのみ嗚呼又奇なり、天下寧ろ又此の如き作なかるべし、然れども是單に疾病甘快に至るの望なき疾病の圖説のみ、何となれば全幅曾て思慮、物情、慈愛を發揮したる所なければなり此畫又悲痛の所なし、何となれば描く所の人物、憔悴したるのみにして、曾て風采の人を動すに足るものなきのみならず、互に相憐むの氣力すら尚ほ之を欠きたればなり故に曰く、是單に疾病の圖説のみ、然れども疾病は畫師の題目とすへきものにあらず。嗚呼ゾーラの近代の巧藝に影響する、一に茲に至るか

幸にして前述の如き恐るべき作物の間に介して、多少の好題目嶄然として頭角を露すものあり。其狀骨堂藏むる所の累々たる髑髏の中より、野花の爛熳として咲出づるに髣髴たり即ち「白人の奴隷の圖」「聲を吞み哀咽する婦人の圖」「寫生に供する婦人眠睡の圖」「老て色を好む不潔の圖」蓋シ白頭ノ好色漢カ婦人ニ昵近スルノ圖ヲ描キシモノナラン「婦人決鬪の圖」等の如き、放蕩無紀の作物に接して、ギテールの「夢の圖」ジェー、レフヱヴルの「孤兒祖母と與に禮拜する圖」ハムバァトの「慈母生涯三段落の圖」ボブゲローの「初死即ちアベルの圖」ハンナアの「聖セバスチアンの圖」エイミイ、パァレツトの「合巹盛儀の圖」ヘバルトの「無名の豪傑の圖」等の如き、絕佳の作物の駢列するを見るあり但し吾人の此等の諸作物を評隲する本論中、他の諸作に於けるが如く、單に題目上より觀察を下せるなり、是其敍事の粗略なるに依りても推知すべきのみ畫の結構、采色潤飾の如きは本論に論ずべきの限にあらず、唯前記諸作の如きは一等出色の作物にして、又以て近代の巧藝の、一旦其汚穢、浮誇、腐敗、醜惡の所を去り、命題の準的、畫師の本務を明にするを得ば、頗る將來に屬望すべきを見るべし。

ギテールの「夢」は趣向の如きは、近代の巧藝に於て、別に一生面を開くものと謂ふべし。其圖一團の戰隊曠野に露宿したる狀を寫す、東天微紅、方に是彈丸雨注の間、功成り死至るの前數時なり、描く所の人物、老いたるあり、若きあり、精兵あり、新兵あり、士官兵卒あり、皆堆積したる兵器に沿ひ、天を仰ぎ四支を啓きて橫臥す、注意、希望、銳意、關心、不經意

等は氣象、猛狗の勇、少年の功名心も與に、隱約の間に見れて躍々たり、上方雲間に一團の軍衆の懸るを見る、夢の如く又雲に似たり、蓋し天兵の寃鬼なり、鷲あり、數羽其傍に翱翔す、劍戟閃々として空に飄る、放火の響、吶喊の聲、肉飛び骨碎くるの音、轟然として虛空に充つるが如くにして而も聞くべからず、是此圖の大概なり、嗚呼何ぞ其れ平澹明白、渾厚朴茂の甚しきや、然り而して斬新なり、古人未發の趣向なり、畫師の能く描寫し得べきものにして而も一種の新趣味あり、嗚呼巧藝は此の如き斬新高尚の理想を發揮するを得るなり、然らば則ち其爲さんと欲して爲すべからざるもの、今尚ほ天下に之なきか。

ジェー、レフェウルの「一寡婦の其孤孫と與に會堂に居圖」及びハムバアトの「慈母生涯の三段落の圖」の如きも亦閎博絕佳にして、佛國畫師壇場の手法と謂ふべし其描く所必ずしも絕麗なるにあらず、然れども萎靡浸溺の病なし、多少鏤刻の所なきにあらず、然れども靡曼纖麗の迹なし、要するに尋常の人の不幸中、簡單無雜にして、能く人を動すの所を寫したるものなり此の如き人性の渾厚の處、朴茂の處を寫したるものは、唯巧藝館に於てのみ之を觀るを得べし。而して其能く此に至るもの此の如く少なきは何ぞや、同一の巧藝館中一方には高尚なる作物あり、ボーケローの「浴者」ベンナアの「ダフニ」希臘女神の名の如き絕佳の幅ありジエー、ブレトニの「牧者の星運」の如き雅健なる山水畫の題目あり、農家の生涯の完粹にして且つ人を動すの所を寫したるものあり、其他筆々精心を注ぎたるもの、南方及東方諸國の故事有職と細に研究したるもの、新發明を爲すもの、新機軸

を出すもの等も亦之あり。而し其他方を顧れば、怪奇驚くべきものあり、愚痴曉すべからざるものあり、放蕩惡魔の如きものあり、憫笑すべきものあり、厭惡すべきものあり、即ち手に自已の首級を携へ、流血淋漓として官道の上を緩歩し、以て田夫野老の其傍に耘耔せるものを驚かしたる、「セントデニスの圖」天上より墮落する巨神の圖、銀河の圖、ブルトー王（閻王）及プロサアピン（閻王の妃）の圖、螺堂中の半人半牛の怪物の圖等の如き是なり。一方は彼の如く巧に、他方は此の如く拙し、此の如くそれ拙なしと雖も、畫師は恬然として愧ざるもの、如く、尚ほ毎歳出品して怠らず、是何を以て然るか、吾人殆と其意を解するに苦む。夫のメイナン所作の警鐘の響の圖の如きは、蓋し病の膏肓に入りたるものか。其圖中古の鐘樓を描く、其中一大鐘あり、烈しく動揺せ、樓下の市街に於ては、屋盖の燃ゆるあり黒烟の地を掩ふあり、又火炎の天に冲るあり、之を熟視すれば洪鐘の鯨吼する毎に、恐怖、破壞、失望、勇敢、憎惡、死亡等の氣禿鷲の如く空間を翔り、狂奔の間鐘を繋ぐの縄を絶ち、鐘樓を震動するが如きものあり、描く所宏壯ならざるにあらず、風致なきにあらず、然れども要するヿ是ウヰクトル、ユゴー樣の見解ヿして怪誕詭譎なるを免れず。唯ミカエル、エンジエロ、チントレ・ツトー（共に伊太利の畫家）タアナア（英國の博物學者）等の才學を一身ヿ具する畫師ヿあらずんば得て、描くべからず。此の如き作物は、一方より言へば怪奇愕くべしと雖も、他方より言へは夫のゴルレツジヨ（伊太利の畫師）のパパルマの伽藍の如く、蟇脛の蒸肉多きヿ過ぎたりと謂ふべし。之を要するヿ此等の弊は、近代巧藝の根底の未た鞏固ならざるより来るもの

ニして、之を救はんと欲せバ先づ次の問題を決せざるべからず、曰く、古代巧藝の紀律、範圍、題目ハ既ニ衰殘して死灰の復燃えざるか如し、吾人ハ當に如何なる新紀律、新範圍、新題目と以て之ニ充代すべきか、是なり。

然れども此の如き問題ハ、藝術家の論決すべきものニあらず、此の如き問題ハ、方今哲學家、思想家を以て自ら任ずるもの、當ニ論決すべきものなり其の通則を定め、以て繪畫の範圍を限り、描くべきもの、描くべからざるもの、區別を明ニし繪畫の信傾、風雅、智見に於ける關係を吾人と畫師とに宣示するニ、吾人の中最も思考力ニ富みたるもの、爲すべき事なり。然るに遍く方今の鑑賞家を見るニ、此等の緊要の問題ハ之を忽略に附するもの、如く、巧藝の瑣末なる處ニ就きてハ喋々妄説するにも拘らず、畫師ハ當に何を描くべきか、の至要なる問題ニ至りてハ、全く之を不問に置くもの、如し。ラスキン氏（英國近代鑑賞家の巨擘）の如きハ、建築、繪畫、服裝否文學に於てすらも、我ヴ井クトリヤ時代の藝術家のために、批評の炬火を執りて巧藝界を照らしたるか如しと雖も、其實ハ畫師の良智と以て、題目取捨するの力を弱めたるニ過ぎず氏ハ其懷抱する所の良畫の標準ニ泥み、唯童心又ハ稚筆ニ過ぎざる作物をも口を極めて稱賛し、小兒白猫兒の如き趣味少き画幅を見るも、手の舞足の踏む所を忘れ、屑々然として近に繪画の皮想とのみ視て、未だ曾て画師の心上に思ひ至らず、且つ人物の形體ハ高尚なる藝術家の最も力を極むる所なり、而して氏の之を言ふ甚だ罕なり、故に所趨に追隨せバ、方今の鑑賞家ハ常に采色の濃淡、錦

欄の善惡の良否に關しては、論辯して止まざるべきを、此等の問題の先驅となり、又之を左右するの力ある題目撰擇の法に至りては、闕然として顧みざるに至らん。若し外國諸流派の通弊は、放肆浮誇にありとせば、英國諸流派の通弊は、纖碎鄙俗にあり。我國の画師は二三を除くの外は、皆世間又學問なるものあるを知らざるが如く、人間として不充分なる教育を享けたるもの、如く、又近代の信傾及風雅の標準を窺測し能はざるものゝ如し。

余の此論文を草するは、世の藝苑に大名ある諸氏に檄して此時弊を救濟せんと欲すればなり、然れども若し此道に邃からざること余の如きものと雖も、尚ほ其所思を開陳はるを得ば、請ふ試に其大略を述べん想ふに展覽會を設けて繪画を衆覽せしむるは、藝術を奬勵する所以にあらず、此の如きも唯良画師の巧を抑へて、拙画師の拙を掲ぐるに過ぎざるのみ、然れども若し止むを得ざれば、バルリントン、ハウスの十二の展覽室に陳列する所の画は、千有餘幅を減じて二百幅とせば稍可ならんか、一百とせは更に好かるべし。但し減じて一百幅とするも、若し其をして眞成の想像と腕力とを具備したる者の作なりとせむ、尚ほ奇異鹵莽の觀なき能はざるべし画幅の題名は簡單明白なるを要す、即ち巴里展覽會の如く、凡そ題名を詩賦、文章、諸書抄錄、ダイヲトラス、シキユラス、マコーレー英國史、箴言、感動、問投詞等に資るを固く制禁すべし何となれば繪画展覽會は滑稽年報にもあらず、又守法教徒の說教壇にもあらず、而して詼諧、滑稽、文學上の警語、及

說教は繪画の體裁を損ずること實に大なればなり、又美術院は萬國博覧會にあらず、故に海外畫師の伎倆を誇示せんがために輸入し來る日本流の畫、「コリンド」畫及其他の繪畫見本は之を備置くの必要なし況や天下の人をして、ラヤルドの「ネニヴ」スミスの故物字典ロウリンソンの「ヘロタドス」及埃及ニ子ヴ、フ井ニシヤ等諸國の著書の名を記臆せしむるの外、別に効益なき作物に於てをや。蓋し繪畫は吾人の熟知せる所のものを執りて之に、賦形し、之を潤色すべきものにして吾人の知らざる所のものを吾人に傳ふべきものにあらず。畫師の本務は小說稗史を著述するにあらずして、生氣と美觀とを執りて、之を吾人の熟知せる事物、若くは理想に被らすにあり故に畫師は唯人をして寫眞尚ほ如かずと云はしめんがために、尋常平庸の物を直寫すべからず、又異常怪奇、思議すべからざる物を彫刻すべからず、天地間高尚優美の處、人心を感動せるの處を取りて、之に千古不磨の形を賦せる、是實に画師の當に勗むべき所なり。

想ふに第十九世紀の博覧會熱は、藝術家、鑑賞家及公衆の目を眩まして、美學上最も觀易き理なるも見るを得ざらしめたるが如し抑々画の其在る所、常に人目に觸易く、其の位地を占め、又其の場所を作り、此の如くにして始終之を觀る者と、卒に性命をなすに至るものなり繪画は書籍にあらず、高閣に束ねて顧みざること能はず、繪画は樂器にあらず、唯適意の時にのみ之を弄ぶ能はず、繪画は猶ほ殿堂宮室の如し常に吾人の目前にありて、同一の感を與へて止まず、詼謔、謎語、奇聞、逸事、傷心、恨事等を紙絹に上して、興味索

然たるを致すは、蓋し之がためなり夫の一對の情人情婦は愛花、桃紅李白、兩ながら人に可なり。「スタアン上人愛蘭の僧灰爐の傍に立てる圖」「粗纏を纏ひたる妖怪の圖」「惡鬼會堂に幽鬼と晤話する圖」「醉人家宅の圖」「ファラヲの女五時の茶を喫する圖」等此の如き奇々怪々、泣くが如く訴ふるが如く、道學を講説するが如く、學識を衒示するが如き、一種の文章を作りたる作家は、曾て自問したることあるか、此等の諸作と購ひさるものは、日々其側に坐し、同一の詼謔、同一の閑話、同一の深遠なる道徳論、同一の閎博多奇の學説に傾聽して、以て樂む所あるかと。閑話の輕妙なるもの、逸事の佳なるもの、出來事の奇なるもの或は、晩餐の時、又は徒然無事に苦む時に於て之を聞けば、多少快きこともあるべし、然れども始終之を聞きて止まざれば、終に狂疾を發するに至らん。諺あり曰く、惡友は良風を亂ると、蓋し至言なりと雖も、若し之を火爐の上に書して、始終目守せしめ、又は之を報火鐘に鑄て、始終耳邊に就きて鳴らさば、世間恐らくは之に堪ふるものなかるべし。ファルスタッフの「顯理第四世」も始終之に傾聽せば、終に發狂するに至らんのみ。且つ若し滑稽画にして、巧藝の一なりと謂を得んか、則ち滑稽風の建物、詼謔様の町會所、隱窓隱戸を上部に附し、螺堂迷路を基礎に作りたる好笑的の宮殿等も、亦巧藝の一なりと謂はざるべからず。然れども天下寧ろ此理あるか又若し怪奇過傷は、英國畫師の短處なりとせんか、則ち佛國畫師の無君主政體論者の吐くが如き、奇矯の説、又は佛國の花柳界に處るものをして、之と聞かしむるも尚ほ面を掩ゐて赧然たるべき一語兩義の辭を紙縑に上せて、

恬然として愧ぢざるものは、當に何を以て之を名くべきか、愚痴鄙陋厭ふべき畫は、愚痴鄙陋厭ふべき歌曲に劣ること萬々なり、歌曲の佳ならざるものは聽くに堪へずと雖も、霎時に消滅して再び吾人を惱ますの虞なし、繪画は則ち然らず、之を貧人に譬ふ、始終吾人に伴ふて曽て滅する期なし、始終同調にして或は涕泣し、或は疾呼し、或は道學を講じ、或は神明を褻瀆して、曽て滅する期なし。

人は平生繪画博覽會、伎倆の競争及「美術は美術ノタメニ存ス」と云へるが如き空論に心を奪はれて、遂に此に述ふるが如き簡明不易の真理の存するを遺れり。古來藝運旺盛の際には、畫師は當時の學者、詩人、僧侶、政治家の指導を仰げり。其題目を擇ぶや、種々の嚴法を奉ぜる其作る所の畫は、世道人心に關すること大なりしなり何の代に於ても、所謂闘藝、若くは五月闘畫の如きものは、曽てあらざりしなり。畫師も亦略人生を潤色し洗濯し、光大にするを以て、又當時の深奥なる標準に、形を賦し色を著くるを以て、自ら命ずべきを知れり。其題目は當時の大人君子發抒し、且つ羽翼せる輿論通議に傍依して之を作れり。而して常に平澹明白、高尚瑰麗にして久しく人口に膾炙せしものなり。(完)

○日本男子の品行を論ず

清水とよ子

七重八重花は咲けども山吹の」てふ古歌は、我日本男子現時の狀態に彷彿たるなからんや我國の男子中には、學文もあり、才識もあり、財産もありて、其花に於ては隨分立派な

る人物もあるなれども、其實たる品行の點に至りては、其人の學文才識と並び稱せられて恥ぢざる者は幾人もなかるべし堂々たる學者あり、政事家にして、其躬行は却て我女子中に些の教育をも受けざりし者に比するも、敢て差異なきが如き行跡あり、況んや其他をや。妾が山吹の古歌を以て之れを評するも、敢て過言にはあらざるべし。

品行の範囲は實に廣濶なるものながら、其内の主たるものは男女の情慾に關する行いを以て最とす。妾は特に此事に就て、我日本男子の品行を論ぜんとす。我日本には藝娼妓なる者ありて、頻りに男子に賞翫され居るなり、彼等は何の必要ありて此社會には發現したるぞといふに、其者各個の身上に就て、一々見解を下す時は、千差萬別の因ありて藝娼となりしならん、然れども之れを需用する人あるが爲めに、此業を營むなりとの事柄に至りては、何れも皆同一因に歸着するならん。故に一方に藝娼妓なる者あるは、他方に色を好む乃男子多き徵證とこそ云ふべけれ。左れど、之れを賣る者も買ふ者も、同じく廉恥を破るものなれば、是が爲めのみにして、男子は皆不品行なり、女子は品行方正なりと云ふことは得べからざれど、之れを賣る者は、女子中の最も賤劣なる一部分の者にのみ止まり居れども、男子は則ち然らず、其人の貴賤を問はず、賢愚を論ぜず、滔々たる二千万人中、未だ曾て藝娼を需用したることなき者は幾人もなかるべし。故に此點より見るも、

我日本の男子ハ、品行方正なりと言ふ事ハ得ざるなり。或ハ云ハん、賣る者と買ふ者とハ同一視す可からず、買ふ者ハ賣る者よりも、其恥ぶるや小なりと。是豈謂ハゆる五十歩にして百歩を笑ふの類ならずや、況んや需用者ありて後、供給者生ずるハ、經濟の原則なるに於てをや。之れを如何んぞ、男子の責に歸せざるを得んや。嗟乎我國男子の多數ハ、泥中の花を愛でんとして、己れも亦泥中に陥りたるを覺らざるなり、憐むべきかな。今や公許賣淫廢止の事ハ、一二有志の唱導する所にして、苟しくも愛國の志ある者ハ、何人と雖も其美事たるを認めざるものハなく、我國の名譽上當然行ふべき事たるにも係らず、政府が是れを斷行するに苦しむが如きハ、必らず他に顧慮する所あればなる可し。其ハ之れを公に販賣せしめざれバ、密に賣買することとなり、社會の裏面に大なる害毒を流すならんとの恐れを懷けばなり。之れが爲めに政府が賣淫廢止の事に遲々するハ、可なるか不可なるかハ暫く措て論ぜずと雖も、斯く政府をして日本男子ハ、到底情慾を制し得ざるの輩、獸類的の慾に惑ひて、名譽をも道德をも顧みざるの輩、公密何れにか賣淫を要するの輩なりと信認せしめしハ、焉んぞ男子たる者の品行、之れをして然らしめたるに非るを知らんや。是實に男子一般の恥辱なるのみならず、直接にハ婦女の幾分を驅りて汚泥に陥らしめ、間接にハ我國体を毀損するの大なるものなれバ、敢て輕々に看過すべ

きに非るなり。故男子ふして假令公許の藝娼妓あるも、敢て之れを需用せず、且其他ふ於ても勉めて劣情を制し、大ふ其面目を一新せバ、政府ハ喜んで公賣廢止の猛斷を行ふふ至るべく、且政府が豫想する如き惡結果をも生ぜず、又彼の賤女子輩ふ於ても、既ふ男子が之れを需用せざるを以て、公ふ於ても私に於ても、此業を營むふ由なく、自然に其痕跡を滅するふ至るべし。斯の如きハ單ふ外部なる政治の改良ふのみ止まらず、其内部をも共ふ改良するものなれバ、一擧兩得の策といふべし。故に妾が藝娼妓なるもの、存在に就て、特に男子を責むる所以のものハ、情慾を制せざるの一事、以て其原因となりしを知ればなり。

因に云ふ、今藝娼を一括して論ぜしを批難する人もあらんが、今日の藝妓ハ娼妓と殆んと異名同業なり、故ふ妾ハ之れを總括したるのみ。

又我國男子中、特ふ紳士とか紳商とか云ハる、人の内ふ於て、藝娼妓を妻とする人多きと見るハ、實ふ難ずべきの事といふべし其ハ其人一己の名譽を貶るのみならず、是亦婦女として藝娼とならしむるの因なればなり。是迄の如く妻を奴隷、若しくハ玩弄視したる頃なれバ兎も角、今日ハ既に夫婦ハ異身同体のものなりといふ理論が行ハる、時なるに一旦牛馬視せられたるものを妻とし、己れの半身となするハ、恰も是己れも牛馬ふ

伍したるの辱あるなり。苟しくも日本の紳士たり紳商たり、若しくは他日爲すあらんとする人士にして、牛馬と列を同うして可ならんや加之ならず彼の藝娼妓なる者が、斯る賤しき業を營むは、決して止むを得ざるに出でたるもの、みにてはなきなり、過半は止むを得く、止まざりしものなり其故何ぞや、今日の社會は、紳士とか紳商とか云はるゝ者程、殊に足を花柳の巷に運び、中には醉枕美人膝、醒握天下權と高吟し、得々として藝娼の膝を枕とする者もあり。而して懇親會とか宴會とか云へる、必らず藝妓を招かねばならぬ狀況にて、初めは悲壯慷慨の志士が、扼腕して演說せし席も、終りは紅裙を翻すの賤女子輩が、喋々し喃々するの場となるが如く、如何なる人、如何なる席にも侍り得可く、其結果や、往々氏なくして瑤輿に駕し、都合能くば何々夫人の尊稱をも得らるゝを以て、將来望みを屬するに足るの營業なりと思惟し、好んで藝娼となる者あり。又我國下等乃父母は、之れが爲め左團扇の樂隱たらんとの目的を以て、殊更に女子に歌舞音曲を練習せしめ、成長するに及んでは、幾百の金を投じて迄も、藝娼とならしむる者もあり是偏に紳士輩が、藝娼を妻とするの誤りに起因するものなれば、最も改めざる可からざるの弊なりとす。

其他我國の男子は、妻あるにも拘はらず、妾を蓄へ若しくは他婦に戯れて、暗に一夫數

婦人行ひを爲す、是十中の八九まで免れざるの弊習なり斯の如き事を爲すは、其妻に對して不敬不義なるのみならず、無情の極と云ふべきなり素と夫婦なる者が結合せしは、此行路難澁なる五十年間の旅行を、相信じ相倚りて、偕に共にせんとの意より出でたるならん、決して妻は子を設くるの器械、臺所を整理するの器具と見做されて聘せられたるには非るべし。然るに妻には專一の義務を守らしめながら、自己は隨意に其愛を他に洩さんとするは、情義上爲し得べからざるのことにあらずや中には子なきを口實として、妾を蓄ふる者あれども、是れ謬妄の甚だしきことゝ云ふべし。子の有無は夫婦間其責何れに歸するやを知り得べきにあらず、然るに之れを單に婦の責とし、己のみ新に他に求めんとするは、公平の所行とは云ふべからず。若し子なきが爲めには妾を置くべしとせば、妻たる者にも男妾を宥すの場合なかるべからず然れども斯くの如きは、素より眞理の宥すべきにあらず、故に雙方共に假令子なきが爲めなりとも、妾を置くべからざるは當然の事なり。況んや其口實是れよりも尚ほ微弱なるものに於てをや、其不可なる敢て多言を要せざるべし。或は云はん、妾を蓄ふるは不可なれども、一時の娯樂に供する爲め、假りに他婦に戯るゝは妨なきにあらずやと。是れまた妄想の甚しきものと云ふべし、斯の如き輩は須らく思惟すべし、今若し己れの妻が他の男子に見えながら、是は一時

の出來心なり、交際上止むを得ざるに出でたるなりと辨ぜんに、諸子は之れを宥すや否や。重ねて置く四ツにするとの野蠻なる言は陳べざるべきも、三行半の保安條例は蓋し忽ちにして發布するならん。故に已れを以て他を推せば、其不可なる妾が呶々と俟たざるなり。若し夫と妻とは同日に論ずべからずといふ人あらば、妾は問はんとす、汝は其妻に貳なきを誓はざりしか、汝の良心は一夫數婦を以て善き事なりと感ずるか、汝は何に依りて一夫數婦の眞理なるを認め得たるかと。而して又問はん、男子と女子とは其感情に於て差異ありや、汝の妻は汝の淫行を怒らざるか、左なきだに女子は感情に敏なるものなれば、豈之れを怒らざるの理あらんや、已に之れを怒るものなるに、汝は已れの欲せざる所を以て、之を他に施さんとするものなり、妾は未だ其善を知らざるなりと。斯く論じ來らば、一夫にして數婦を蓄へ、若くは之れを蓄へざるも、妻の外なる婦人に接するは、咎むべきの行ひなるや明らかなり。然るに我國多數の男子は、倫理を破りて我儘勝手の所行を爲しながら、妻たる者が一言にても之れを非難する時は、嫉妬は女子の謹しむべきことなりと、自己の不品行を棚へ上げ、却て妻を制するが如きは、無情の所行には非ざるか。如何に今日までの婦女が、之れを矯むるの資格なき爲め、暗涙を呑んで之れを默に付し居たればとて、如何に我が刑法は、男子の姦淫を行ふの罪を罰せざればとて道德

の罪人となるをも覺らず、其劣情を恣にするは、切に男子の爲に採らざる所なり。
之れを要するに、斯くの如き仕義となりさるも、必竟今日までの婦女が概して學問なく、財産なく、職業なかりしを以て、男女清潔の交りを爲すを得ず、情交に於て慰む所なかりしを以て、遂に男女の交りと云へば、肉躰に止まる事となり、其極女子は常に男子より輕侮され、玩弄物、奴隷の待遇を蒙り、女子もまた自暴自棄の餘、公然其不當と責めざりしを以て、男子は憚る所なく、社會に跋扈し、遂に遊蕩の輩とはなりしなり且古來我國に行はれ居たる道德は、至極偏頗なるものにてありしなり、其一二を擧げてみれば、貞女は兩夫に見へずと婦女には敎へながら、男子には妾を蓄ふるに、其姓を知らざればこれを卜すとて、妾を蓄ふることをさへ公認せり又嫉妬を七去の首位に置き、而して七去の責と女子にのみ負はしめたるが如き、決して其當を得さるものにてはあらざりしなり。是を以て男子は之れを奇貨として、隨意に姦淫を行ひ、一夫にして數婦を蓄ふるものは、却て富の度高きを示すがごとく、他人も亦之れを見て羨稱したる程の事にてありき。古來函入娘の稱號はありながら、函入息子の唱へなかりしと以て見るも、男女品行上の撿束に、寬嚴の差ありしを知り得べきなり斯く一方には密、一方には疎なる道德が、是認され居たるを以て、男子は氣儘隨意の行ひをなし、今日に至りては、既に習ひ性となりたるもの

ゝ如く、何人と雖も皆習慣の奴隷となりて、男子は到底女子のごとく劣情を制し得らざるもの、又制せざるも可なるものと思惟すること、なりしなり、故に既往の事は強ちに今代の男子のみを咎むべからずと雖も、現時と将来との二者に於ては、切に今日の男子に望まざるを得ざるなり試に思へ、若しも我明治の社會にして、今日まで少しも舊来の面目を改めず、毫も文明の大氣に觸れざりしならむ、其道徳も亦封建時代の遺傳の儘、之に支配せらるゝも不可なからんか、今日の日本は決して昔日の日本にはあらざるなり、百事百物、日新月化し、例外の速力を以て、非常に進歩したるの日本なり、且又将来尚ほ大に進歩すべく、又進歩せしめざる可らざるの日本なり。故に今日の日本人民が標準とすべき道徳は、文明的の道徳ならざるべからず。然るに男子諸子は、他の事に於ては、成る可く改良を欲しながら、男女間の關係ある道徳に於てのみ、其缺點を見出さず、或は之れを知らざる真似して、舊弊を保存せんとするは、豈自家撞着の所作にあらずや。且又我姉妹が二千年の迷夢を破らず、或は幾分の學識を獲得しながら、職業なく、財産なきが爲め、自ら進んで天賦の地位を回復せざるとて、毫も同胞の仁愛として之れが地歩を得せしむる事を爲さず、頑然自ら尊大にし、却て其進路を遮絶せんとするが如き、是徳行ある人の當さに爲すべきの所作ならんや知らずや、文明國の稱號は、人智人文の二者

のみを以て購ひ得べきにはあらざるなり、紳士てふ名目は、學識財産の二者を代表するの語にはあらざるを德行なきの國は、真成の文明國にあらざるなり、品行を兼ねざるの人は、真成の紳士にはあらざるなり朝に鬚を捻りて時事を談じ、夕に膝を崩して柳橋の花に戯れ、賤業者流を妻とし、若しくは數婦に馴れて、婦女を玩弄視するが如き、之れを如何んぞ文明國人の所行と云ひ、紳士の所作となすを得んや。今や憲法てふ未曾有の花は既に開き、國會てふ見事なる花も遠からずして、十年來の蕾を破らんとするの好時季なるに、「實の一ツだになきぞかなしき」と嘆ぜらるべき山吹然たる身を以て、文明國裡の春を占め、百花の主人と爲らんとするは、笑止の極といふへきなり冀くは深く自ら猛省して、幸に大に改むる所あれ。

家政

○育兒衛生法

關場不二彦稿

營養（一）

小兒の發生成育をするには、其營養物は物質上にも分量上にも、小兒に適合せざるべから

らず、若し小兒の身體と此營養物との間に於て其平均を失ふ時は、先づ發育を妨碍し、遂には小兒の死を來すべし。　歐洲の統計學者の調査に從へば、一歲未滿の小兒死亡數一百名につき、其半は皆消化器の障碍に因れり而して瑞典及び諾威に於ては、死亡數僅のに十乃至十三％（百名につき十名乃至十三名に）過ぎず、是れ此の兩國にては、母乳を以て養育するを慣習とすればなり。　又歐洲中巴威及び烏天堡兩邦（共に日耳曼にあり）は、實に惡習ありて人工滋養（事後係に詳かなり）にて養育するを以て、小兒百人中消化器病によりて夭折する者、四十三人より八十五人に達す。其人工滋養といふは、主として乳中に麵包の粉を混ぜし者に成れるなり。

最安全、最善良の營養品は母乳なり、殊に自己の乳液なり。　抑も乳液は水分、塩類、蛋白質、含水炭酸（乳糖）の一混和液にして合成したる脂肪（牛酪脂）を含蓄す。即ち他の辭を以て之を言へば、乳液は完全なる營養品にして、兒之に賴りて生活し、之に賴りて成育するが成分を含むものなり。

乳中には、十分の蛋白質、十分の脂肪、二十分の砂糖といへる、關係にて、これ等を含蓄せり。而して乳の色は不透明、帶青白色にして、其味は微甘、其臭は固有のものなり其異重は千二十六より千三十五（平均千三十二）（品質を區別するに必要なり）に達す乳液中の脂肪は元と水より輕くして浮遊するものなれば、液の表面に一薄皮を作るなり、之を乳皮といふ又乳の反應

は亞爾加里性の者にして、若し酸性なるときは乾酪素沈澱す。是等の理學上及び化學上の性質は、妊娠の最終日、並に分娩の第一日に於ては異なれり。其乳液は初乳 Colostrum と稱し、重もに帶黃の色となし、脂肪と塩類に富み、即ち所謂る初乳小躰を含むなり。此の小体は微に下痢するの作用ありて、彼初生兒黑糞 Meconium（初生兒初回の糞便にして粘液胆汁腸エピテル嚥下細胞毛よりなる）を下降するに宜し。　是れ天公自然の妙作用なれば、世俗にて胎毒を下さんとて五香散と稱する大黃紅花甘艸等より成る藥物を與へ、或は鬼漿根を煎劑として與へ、生兒の消化器未だ完全ならざるに之を害せしむるは惡弊の甚しきものなり。

初乳は漸々白色となり、初乳小体は消失す凡て母乳は種々の原因にて、成分分量とも變することありて、小兒は爲めに下痢を起し、衰弱を來たし、加之時々小兒の搐を招くことあり、是れ殊に注意せざるべからざるなり。

第一、母の感情　母は怒り、或は驚き、或は恐怖する等、不時の感情を作すときは、乳液の量は減少し、或は閉止す是れ其一時なるに過ぎずと雖ども、養育者は注意を要すべきものなり。

第二、月經　此の時に方り小兒を乳すれば、小兒は嘔吐及び下痢を得ること少なからず、故に小兒の營養品を暫時變更せざるべからず。

第三、新懷胎　母また妊娠せるときハ、小兒にハ他の乳液を擇ぶべし。

第四、乳線發達違常　乳線の發達充分ならずして、其分泌些少にして充分に小兒の營養に適應する能はず、然るときはまた他に求めざるべからず。

第五、乳房疾病　乳房焮衝、乳房諸腫（癌腫）乳房皸裂、乳房濕疹等のときには、乳腺或は膿漿を混じ、感染性の毒を含み、乳液ハ變更して小兒を害すること少なからず、故に此の乳液を與ふるを禁ず。

第六、母体疾病　結核性病、癲癇、急性傳染病等に當りては其乳を與ふべからず、殊に熱度の高きに於ては乳の性狀を變ず。

第七、食品　母若し容易に醱酵すべき食品、乃ち馬鈴薯、甘薯、豆莢、蕪類、蘿蔔等を食するときは、其醱酵すべき成分は、小兒の消化器中に入りて、腸管に瓦斯を釀して腹部を鼓脹せしめ、或は腹痛を起す等、小兒及障害少なからず、是れ固より一時なれども柔弱なる兒体にありては著るしき損傷なり。又亞泥子、葱根、鉛類、阿片、水楊酸、沃度鐵、亞鉛、水銀等及芳香類藥品ハ、母之を服すれば乳中に入るものなり、殊に沃度加里の如きハ、母之を服すれば乳線萎縮し、其分泌（乳の）の弱くなることは注意せざるべからず。

右は乳液を與ふるにつき可否の要點なり。今次に何如樣にして乳を與ふべきか、何許

歳まで單ニ乳のみを與ふべきかを略言すへし。

世俗ニ於ては、産後五香散を小兒に與へ、胎毒を下すとなし、其他種々の煎劑を服せしめ、以て不明の病源を驅除し、母体の毒物を除却せんと欲するは、大なる誤信ニして奇怪の惡弊といふべし、彼の毒を下さんとして、却て毒を新たニ輸入すると異ならず、嘆ずべきの甚しきものなり。凡そ乳ハ出産第一日よりして其小兒に與ふへし、決して藥物を無用にも誤り用ゐて、柔弱なる腸胃を刺戟する勿れ。

第一日にハ二時間毎に乳を與ふへし、夜ニ入れば三時間乃至四時間を以て常規となす、已ニして漸を以て其度數を減じ、夜ニ到り十一時より翌朝四時まではハ授乳を休むなり。また五六週間後ハ晝間ハ各三時間毎ニ授乳することも宜し。小兒の生るゝや精神と倶ニ生れ来らず、縱令ひ脳あるも唯ゝ漸々發育するのみニて、其精神ハ更ニあるなし、(是れ社會に立つ能はざる所以なり)然れども彼の肉体上の感覺ハ倶に生れ来りしなり。即ち飢餓と冷凍との兩覺ニして、小兒ハ猶ほ未だ見る能はざるニ、(二乃至四週間にして初めて能く明暗を區別す)已ニ能く乳を吸ふこと是れなり。已ニ飢ゑず、また冷かなる者ニ觸れずして、温煖ニ其身を包裹せらるゝ時ハ小兒ハ能く睡るへく、然れども若し飢餓凍寒各ゝ逼るときハ、泣くを以て常とす、乃ち小兒ハ誕生後知らず識らず、知覺を以て冷と飢とを區別するなり。

幾許歳まで單に授乳すべきやに就きては、則ち乳齒の生ぜる時までを以て期となすものなり、乳齒は第九ヶ月第十ヶ月の頃に生ずるものにして、是れ天公の他の食品を取ると許せる一徴なり。然れども今急に他の食物に移るは宜しからず、况して盛夏の際は之を忌むなり、また腺病性或は英吉利病性を有する小兒にありては、授乳の歳月稍ゝ長きに渉るを可とす。

彼の梅毒に就きては嘗て一大問題なりき。然れども此梅毒性の母は、心を安んじて其子を乳すべし、決して其害をなすべきものもあらざるなり。また一婦人に在りては、其乳液は非常の勢にて射る如く流るゝことあり、又熱の高きを覺ゆることあり、(乳熱)是時に當り母は宜しく乳の膨大して堅き塊、或は綱状の隆起を見るときは、其部は按摩すべし、而して後乳房は弛緩し、其乳を與ふることを得るなり。また時として小兒より吸はるゝ時、其部に痛むこと多く、殊に腹部に方り一疼痛を覺ゆるは、反射的に起きる子宮の收縮にして、母は別に之が爲めに醫診を受くるを要せざるなり。

前陳せるごとく、母は其乳を與ふること能はざる事實あり、又自らも與ふることを忌むとせは、先づ乳母を求めて代らしめざるべからず。抑々乳母を撰びて其子を養ふは、頗る至難の事にして、殊に注意を要すへきものなり、今一々乳母の備へざるべからざる

條欵を列擧せバ、

第一、乳母ハ充分ニ健全ならざるべからず

第二、強壮ニして遺傳病或ハ慢性傳染病(梅毒、結核病、腺病)なきものハ撰ぶべし、醫士に乞ひて寧ろ陰部を撿定せしめ、諸腺の状態を診せしむべし。

第三、已ニ數多の子を有せる乳母ハ尤も可なり、其乳房の善く發育するものを宜しとし、また乳量の性状につきても探討すべし 加之乳母自己の子を見て、其子皆健全なるときハ、其乳母の健全なるも、其乳の性状の善きも、倶ニ知るを得べきなり。

第四、乳母の性質ハ善良温順なるを擇ぶべし、若し其の性質の神經性、多血症等にして感情深きものハ、乳液ニ變化を來すなり。

是の如く乳母を撰擇するハ難し。若し適當の乳母なきときハ、遂ニ人工滋養、動物乳液等ニ依らざるべからず。

(以下次號)

文藝

○近詠十六首

佐々木光子

梅久雨　今日も又、軒の糸水、さみだれぬ、うけらの畑、結ぼゝれつゝ。

夜橘　たちばなの、匂ふあたりの、袖枕、ひとりねしたる、心地社せぬ。

殘鶯　打ろよく、若葉の上に、風見えて、なくね凉しき、園のうぐひす。

待時鳥　藤の花、ちりての後も、まつにのみ、こゝろのかゝる、時鳥かな。

螢

ちりぬれば、またもをたきて、草の葉の、露吹風に、とぶ螢かな。

山雲　箱根山、あけかた近く、見渡せむ、雲ゐかけての、心地こそすれ。

旅宿　草まくら、うれしくむすぶ、故郷の、夢の末ふく、野べのさ夜風。

猫

またひきて、ひざを離れぬ、猫なれば、いとふ中にも、哀也けり。

王昭君　住なれし、花の都を、よそにして、ちり行身こそ、悲しかりけれ。

述懐　呉竹の、嬉しきふしも、憂ふしも、茂くのみなる、世に社有けれ。

寄松祝　とことはに、千代を伴なふ、松風の、音こそ君が、思ふせちなれ。

寄竹祝　おのづから、風にまかせて、争はぬ、竹を心に、千代も經ぬべし。

晴天鶴　武藏野の、緑のそらみ、若草の、妻よぶたづの、こゑぞうらなき。

蓮

池水の、あゐより出て、花蓮、うすくれなゐに、にほひぬるかな。

船納凉　舟うけて、清き川とを、こく程は、夏もながるゝ、こゝちこそすれ。

名所松　杖つきて、たてる姿に、知られけり、老にけらしな、志がの浦松。

○大宮公園に遊ぶ記

佐々木信綱

四月廿七日、根岸盾臣ぬし訪ひきて、明日は大宮公園に舞樂保存會のあなれば、諸共に物せまほしきれる事もなしやと云ふに、おのれ未行きしことなければ、うべなひて思ひ立ちぬ。廿八日、つとめまうながしつる淺草根岸主の家ゐをとひ、井元時一、鈴木直肅と共に上野の停車場にゆき、九時の汽車にのる。王子わたりより飛鳥山を見渡すに、うつろひがたの花の梢とも、こゝかしこに猶残れり。志ばし行きて田面を見るに、田舎びたる賤がふせ屋など、市のちまたにのみ住身には、いと目さむる心地して珍らしければ、走り行く車も止めまほしくて、

蝶がとぶ、田川に立てるうなゐ子か、魚つる袖に春風ぞふく。

賤のをか、門田の麥生春さゝて、穂に出へくも成にけるかな。

小蝶おふ、うなゐか袖もゐをるめり、鈴菜花咲く畑のなか道。

十時比大宮につきぬ。もとの中仙道の驛にて家居立つゝきたり。

さとびたる、田舎少女の行かひて、その名空しき大宮のさと。

十丁あまりゆけば官幣大社氷川神社なり。延喜式に名神大月次新嘗と見え、一宮記ふ素盞嗚命と祭れりと見えたる御社にて、並木は松原立つゞきいと神さびたり。社務所神樂殿の前を過ぎゆくふ、いと大きなる池あり、反橋かゝれり、ろをまたれば大前なり、をろゝみまつりて、

みづ枝さす、椎のこやてを露ちりて、氷川の社春ふけまけり。

又三丁ばかり行きて、槙の尾といふ温泉の樓まのぼる、庭いとゆほひかに清らなる家居なり。こゝふ待ちゐたる盾臣主の父母、武香主、直子の刀自、妹ゑみ子ぬしふあふ。舞樂は一時よりときけば、皆人と共に後ろの野べま行きて遊ぶ、

春の野ま、菫つむ日ぶ心ころ、うなゐはかりま變らざりけれ。

雲雀をきゝて、

ひばり鳴く、野べは菫を席みて、心もそらふあそぶ今日かな。

八重櫻、つゝじ、さうびなど今を盛りと咲きみちたり。ゑみ子、土産ふせて菫、土筆、まらびなどをあまた束ねたれど、まれは

家土産に、いづれをうせん春は野に、咲匂ひたる花のいろ／＼。

こゝの岡より見おろさふ、小田の景色云しらぞ、

山ざくら、ちりて浮べるふもと田の、苗代水に蛙なくなり。

うつる程に、時うつりぬれば、槇の尾をいで、故白根縣知事の記念碑の前わたりして、舞樂縱覽所につく。御社の前にあげはり打ち、さじきを四方にめぐらし、其中央に舞臺を設け、いと廣うしつらひたり、されど數多見る人のつどひされば、所せきやうにおぼゆ。やがて絲竹の音に調へ合せてまひ出づ舞人は、皆式部寮の伶人にて、裝束ことさらゝかなるは目もあやなり、おのれは唯昔ものがたりにて其樣をよみたるのみなれば、萬歳樂、延喜樂、陵王などの舞いとめづらし、

いにしへの、樣おもほえて面白く、ひるがへしたる舞の袖哉。

納曽利は入あやにて、殊にをかしきを、空曇りたれば、いとうしろめたうおぼえしに、程もなくほろ〳〵と降り出したる雨いとまびし。さて舞をへぬれば、もとこし道より停車場へゆくに、いよ〳〵降りまされど、雨皮も持たでいみじうぬれければ、かたへの家にしばし休らひぬ。この山吹を見てたはふれに、

みのありに、立ちはよらねど賤が屋の、八重山吹ぞ今盛なる。

からうじて大宮の停車場に至り、滊車をまつ程そこら見出でゝ、

そぼぬれし、袂を見つゝ、春雨は、わびしと云はぬ旅人もなし。

ほろ〳〵と、椿花ちる賤のをが、垣ほさびしく小雨ふるなり。

こゝより武香ぬしは青山へ歸られしかば、直子、ふみ子、盾臣、時一、直肅と共に上野にあへりつきしは七時ごろなりき。さて今日ははじめて舞樂を見しかば、今より源氏、大鏡などをとかんにも、少しは便にもなりなんといと嬉しく〳〵、其夜やがて今日のさまをかつ〳〵記しつるになん。明治廿二年四月廿八日竹柏園のあるじ信綱。

○ふしぎの再會（上）

山陰樵夫稿

深山住居の長閑さは、訪ふ人もなきまゝに、晝さへ閉ぢる柴の戸も、今宵は雪に埋もれて、窓漏る燈火影あかく、歌よむ聲の聞ゆなり。更けゆくまゝにさえさゆる、深山おろしの寒き夜も、なれてや遊ぶ水鳥の、鳴く音もさむしふゞきして、裏の松風音そごく、淋き泉の聲すなり。「のふもししばしもの申す、妾は旅の女子なり、つれとし頼む者はなく、道なき山に行き暮れて、やどりし今にあらなくに、山風さむく雪ふかく、弱き歩のはかどらず、いとゞ難儀にはべるなり、願ふは此處の軒の下、納屋の隅とていとひなし、あはれ一夜の宿をば、惠ませたまへたのむなり。」雪に埋る柴の戸を、力もなげに打ちたゝく、乙女の聲のかなしげに、呼ぶに主人も答へつゝ、雨戸か

ひやり立ち出で、「去ても難義におはすらん、賤が山屋のもてなしは、まへらすものは少きも、錦のしとねはなけれども、草の枕や木の下に、勝をとやおぼしたまはらば、いざはいらせさまへかし。」情を込めし山人の、やさしき言葉は夏草の、露にぞ遇ひし心地して、嬉しさあまる乙女には、霎時言葉も涙のみ。渡る浮世に鬼なしと、世の諺も身に積る、深雪の袖を打ち拂ふ、問さへ主人はあひ〴〵しく、ゐろりの湯などくみとりて、進むるまゝに足清め、誘ふまゝに内に入る。主人はなほも焚き殘る、柴をゐろりに折りくすべ、濡れし衣を乾かせつ、木の實の籠を持出て、麥の飯など取出し、「定めてながら乙女には、餓えてやおはしたまふらん、なれども山家の悲しさは、まへらすもなも是のみにて、あてのたしには足らざるも、一時の飢を凌がれて、靜にやをらひたまへかし。」心づくしの饗應を、爲をは側ら何ふかくと、古き史傳を引き出で、旅路のうさを慰むる、主人の心は樂しげに、見ゆれど哀れ乙女子は、尚ほ晴れやらぬ旅の天、故鄕戀しと思ふにや、頭を垂れてもの言はず、やせさへ見ゆる細うでに、衣の袖をかき合せ、思案に暮るゝぞ哀れなる。ふびんの者やと主人さへ、そゞろに涙を催ふして、そも如何なれば乙女には、なれし古鄕ふり捨てゝ、つらき旅路に如何なれや、憂をば重ねたまへるや、古鄕はいづく名は誰と、聽かせたまはれのふもし」

と、尋ねに乙女は猶更に、眼さへ涙にかき曇り、又ひとしきり降る雪の、竹より落る音しげし。溢るゝ涙を幾度か、押し拭ひつゝ旅人は、聲もあはきふ話し出す、「妾は大和の十津河の、ほとりの村におひたちし、梅子と申す者なり」と。半いひ出す言の葉、を聽くとひとしく主人には、眼を視はり何事か、打ち驚きし樣子にて、乙女の顏をつく／＼と、ながめて餘念はなかりけり。乙女は尚も語をつぎて、「ほんに思へばいとしや、妾が七歳の其年に、父は冥土の人となり、頼む木の間に露もりて、袖の濡さへ朝夕に、乾くいとまのなかりしに、悲しや杖とも柱とも、頼みし母も去年の秋、無情の風にさそはれて、落葉と共にあへなくも、歸らぬ者となられける。父が在せし其の折は、かなり豊かに暮せしが、子供といへば妾のみ、男子のなきを父母は、便なきことゝ常々に、恨みかこちておはせしが、或日のことよ父上は、近き傍りの深山路に、獵をせんとて入られしに、男子の餓えて疲れしが、木の根に腰をかけしまゝ、眠るが如く死してあり。如何なる人の子なるにや、年ても行かぬ其上に、旅にやつれしなりかたち、此土の者とも見えざるが、仔細ありげと立寄りて、藥を與へ水飲まし、聲をかぎりに呼び渡す、介抱殘りなきまゝに、男子も息をふきかへし、四方をながめて何事か、云はんとすれど飢えたれば、聲さへ出でず拜むのみ。もと父上はなか／＼に、あ

はれみ深き生れつき、如何で見捨て居らるへき、童を下男に負はせつゝ、我家にともなひつれ来り、ゆなど與へさまぐと、旅のつかれを勞はりて、聽けばあはれや其人の、父は幕府の身方して、忍が岡に打死し、母御はそれより間もなく彼の世の人となられしとか。さはさりながら此頃は、世は苅菰と亂れつゝ、知りしやからも散りぐと、別れさまよふ時なれば、孤なりとて誰ありて、助けはぐゝむ者はなく、十二の年の子心に、おぼつかなくも思ひ立ち、些の縁故を紀州路に、尋ねて歩み給ふ中、路に迷ひて深山路に、二日二夜をさくらし、餓とつかれに歩みかね、木の根に腰をかゝしまへ、あはれ野獸のゑじきとぞ、ならんとせしを不思議にも、我父上の行き遇ひて、助けしことの元末を、聽くより父は猶更に、あはれの者とおぼしめし、袖すりあふも他生の縁、それらを救ひまへらすも、結むぬ自然のえにしとて、其儘わが家に宿らせて、我子の如くいつくしみ、文世々々と朝な夕、寵愛いと深かりし、文世主にも我が父を、命の親とかしづかれ、立居振舞言葉つき、流石に武家のながれとて、何處やら秀れし其が上に、文よむ業を好まれて、暇ある度に文机の、下にぞおましたまひたり

○ふしぎの再會（下）

遠山影も散らぬ雪、のぼらぬ雲と見る花も、一夜嵐の吹きすさみ、散れば芥の川水と、なる世の中ぞあぢきなし。父が死なれしあくる春、いかなる理由か文世主、家出せしまゝたよりなし、妾は其時漸くに、六七歳の頃なれば、知るよしさへもなけれども、亡き母上が折り〳〵の、寐物語にかになくと、父が逝れし其折りも、母も殘さる言の葉も、末は文世をかく〳〵と、仰せられしと聴はべる。おん顔ころは忘るらめ、花みる度になつかしき、月見る度にしたはしき、文世主だにおはしなば、浮世の坂ののぼりをり、頼む杖としたのむべき、甲斐もなぎさの捨小舟、よるべなき身をかこちつゝ、須磨ぬ思ひを日がさねの、浦の塩風いとあらく、たゆらき山に鳴く鳥の、鳴きすみ明石かごの島、籠の小島の世を知らで、とやかく思ひに沈むのみ、末はふちえとなるしまや、やの、神山顧かけて、禱りし誠の通ひけん、月もさく月此秋に、思ひかななき人傳に、文世とやらいふ人は、三年あまり前つ年、吾妻のさとに在りしとぞ。聞く嬉しさは如何ばかり、八重の塩路をはる〴〵と、逢ふを頼みに尋ね来てきゝはかなしや其人は、面白からぬ世の中の、塵をいぶせく思はれて、行衛も知れずなられしと、きゝて頼のつなもきれ、望の庭もあれはてゝ、思ひを通はす道もなし、實にやもとより定めなき、世といひながらあぢきなき、身をかこちつ世をうらみ、まれ

も浮世とすて衣、重ぬる旅の此月日、山といへば分々のぼり、谷といへば踏み入りて、つくす心もうたゝたの、泡となりては消るのみ」主人は始終うつむきて、何か思案にくれたるが、漸く思ひ定めけん、茶など入れてぞ進めつゝ、未だ言葉はなかりしに、乙女はなほもあとやあま、あたりをながめ側の、壁にまとえりたる短冊に、ふと心づきながむれど、

うきくさの、根なき言の葉聞く世より、
深山のおくやたのしかるらん。

文世まるすと書、またる、事の様子のいぶかしさ、たづね見むやと思ひたち、「のふ主人の殿些とばかり、問ひまへらせんにゆるされよ。見まべ彼處の短冊に、文世まるすとか、れたり、名さへ歌さへ此日頃、まな身がたづぬる其人ま、どこやら似たる意地する、若しやおん身の知人に、おはしたまはゞ願はくは、如何なる人の人となり、成り行きなりと教へさせ、給はゞ此上なき恵なり。」主人は漸時打案じ、太き息をばほつとつき、「偖は御身が文世ぬし、命の親のおん子まや、彼の短冊の主こそは、まことおん身のたづねらる、文世主までおまもなり、」と云ふをきくより乙女子は、膝をりよせつ遽がしく、「あて其人の隠れ家は、何處の山かそもや又、何處の谷母候ふや、」問へ

は主人はかなしげに、「お話し申すもなか〳〵に、痛ましながら其人は、わが身と共に幾年を、學の窓におはせしが、世の人ごゝろ賴みなく、浮世といへば浮草の、根なき、ことのみはびこるを、いと本意なく口惜しと、恨みかこちておはせしが、浮世大路の濁江に、穢れし花を見んよりは、浮世はなれし草の庵、塵なづまぬ月影と、ながめんものを共々に、此處に柴垣結びしに、うきは此處にも晴れやらで、軒端の月の曇りがち、思ひがけなく文せぬし、裏の谷川行く水の、歸らぬ者となられけり。實に世の中ふありといふ、うきは限りのあらざるも、親しき人の諸共に、いまさぬほどはあぢきなく、つらしと思ふことはなし。おん身も早く故郷に、歸させられて知り人や、すからやからの歎きをば、慰めらるゝ事こそは、人を助くる道ならめ。」哀れや乙女はふびんさや、涙にむせびよゝとのみ、聲も惜まぬ泣きさけび、正体なきまで伏しまろぶ、子供心のあはれなる。主人は腕を拱きて、眼を閉ぢてものいはず、乙女は何を思ひけん、つと立ちあがり其儘に、ものをもいはで戸の外に、走り出でなん有様に、主人も不審と立ちあがる、此時おそく彼の時はやく、乙女は表へ飛び出し、降りつむ雪をものともせず、こけつまろびつやう〳〵と、雪をあかりに鰐魚の、口かとばかりものすごき、谷のふちへとたどりつき、南無と一聲既ふえや、谷の野獸のえじきとぞ、成ら

んとせしを山人は、あはたゞしく馳せよりく、袖をしつかと取り押へ、「のふ梅子どの氣を靜め、短氣は思ひ止まりね。「イエどうしても此手をば、そなしてたまへ是れもふし、父にも母にもすてられて、頼み空思ふ其人の、在家はやう〳〵知れながら、うちしや言葉も通はざる、冥土の住居なさけなや、命は假りの浮世ぞと、兼て聞きおしおとなれば、一日も早く父母や、文世ぬしの跡をおひ、彼の世にかへる心ぐみ、はなしてたまへ此手をと。」もがくを主人はなほ止め、「死ぬとは短氣あやまてり、誠と我身は文世なり、先死に名のりをせんものと、思ひしながらおのが身は、浮世をすてしわび住居、女子ありて用のなき、深山の奥にむざ〳〵と、盛りの花を散らさんも、いとおしければとやかくと、いひつくろひし身の罪はゆるさせたまへのふ梅子、短氣は思ひ止まりね、「さてはおん身が文世さま、なんなつかしや」と取りすがり、先立つものは涙のみ。文世も眼をしばたゝき、可愛の者やと抱きしめ、「わんふおん身の兩親に厚き情を受けながら、家出せしまゝ音信せず、恩を仇なる行をも、見すてたまはでかほとまで、思ふて給ふれこゝろざし、おん父上のおいつくしみ、思いひでられいとゞなほ、嬉しさもまたとへなし、いざ庵へもろともと、かひ〴〵しくも雪道をいたはりつゝも歸り行く。折りから雪も降りやみて、雲間を漏る、有明の、月もふしぎの再會

を、よろこび貌に脱らじけり。

○竹取翁物語講義　第五

琴條女史

かくやひめいはく、よくもあらぬ形を、ふかき心もしらで、あだ心つきなば、後くやしきともあるべきを、と思ふばかりなり、世のかしこき人なりとも、ふかきこゝろざしを知らではあひがたし、となむおもふ、といふ、

よくもあらぬ形　とは卑下していへることなり　○ふかき心もしらで通ひ來る五人の君等の深き心を知らずてといふことなり　○あだごゝろつきなむあだごゝろは　他心にてあだとは轉變(ウツリカハ)りやすきをいふあだなる花などいふ皆おなじ意なり此處にては姫を戀ふる人々の心變りすることをいふ　○後くやしき　後悔といふ意なれどもこゝにては輕く見るべし。此處の一節いたく省略したる文なれば語を補へて見るべし、みめかたちの美くしもあらぬ妾を慕はるゝ方々なれど、眞實に妾を思ひたまへりや、御心底の程計り難し、果して深き御心ありやなしや、其を知りもせで容易(タヤス)く承引きて、もし此の君等が深き御心あるにはあらで、間もなく御心變りもあらば、其時は誠に後悔しきこともあるべきよと思ふる、といふ意なり　○世のかしこき人　世のは下の語意を強むることなり――かしこきは高貴なるをいふ「まー世に貴い人」といふ程の義なり

大意、　かくや姫ノイフニハ、容皃ノヨクモナイ此身ヲ慕フテ下サル、方々ノ御心ハ、眞實ドウイフ思召ヤラ、深イ御心モ知ラズニ容易ニ御承知申シテ、御心變リデモナサル・樣ナヿガアツタナラバ、其ノ時ニハドンナニ悔シイダラウト心配ニ思ハレマス、タトヒ世間ノ貴イ御方ダカラトテ、深イ御心ヲ見抜カナイ内ハ、承知シテ御合ヒ申スヿハ、出來マセン。

翁いはく、思のごとくものたまふかな、そもそもいかなるこゝろざしあらん人にかあはんとおぼす、斯ばかりこゝろざしおろかならぬ人々にこそあめれ、

思のごとくも　己が思の如くもなり　○そもそも　俗にソレハマアといふ意なり　○斯ばかり云々五人の者の心を込めて通ひ來るこゝろざしをいふなり　○あめれ　あるめれなり

大意、ソコデ翁ガイフニハ、翁モカ子テ左樣思ッテ居マシタ、誠ニ私ノ考通リ仰セラレルヿデアル、ガ、ソレハマア一体深イ志ヲ見テ合フトイフハ、ドンナ志ノアル人ニ合ハウト思召スヿデスカ、此頃通ッテ來ル五人ノ人等ナドモ、隨分疎ナ志ノ人等デハナイ樣デスガ。

かぐや姫のいはく、何ばかりのふかきをか見むといはん、いさゝかのことなり、人のこゝろざしひとしかなり、いかでか中におとりまさりあらむ、

何ばかりの深きをか見むといはん　是のみにては志のふかき處は見わけられぬと、なり　○いさゝかのことなり　毎日毎夜通ひくる位のことは聊の事なりとなり　○人のこゝろざしひとしかなり　さて是より下は翁の詞なるべしと解にいへり一應は然(シカ)思はるれども尚熟讀み考ふれば下につゞきて皆姫の詞なるべく思ゆ。是等の人々の志は皆ひとしきものにていかで其の中にまさりおとりあらん實に普通のものにて別段深き志といふに足らぬとなり‖ひとしかなりは　ひとしかるなり

大意、ソコデ又赫夜姫ノイフニハ、是ダケノヿデドレ程ノ志ノ深サヲ見ヤウト申シマセウヤ、此ノ位ハ僅ノヿデス、此ノ五人ノ方々ノ志ナドハ、大抵皆同ジモノデ、其ノ中ドナタヨリドナタガ志ガ深イナドイフ優劣ハ、ドウシテアリマセウヤ、アリハシマセン。

五人(いつたり)のひとの中に、ゆかしきもの見せ給へらむに、みんこゝろざしまさりたりとて、つかうまつらむ、と其のおもむきを人々にまうし給へ、といふ、

ゆかし、與ゆかしなどいひて何となく其の方へ心引かるゝ如くなるをいふ語なれども轉りては心に希望むものをゆかしきものといふ。此處にては見まほしきものといふ義なり　○見せ給へらむに　給へらむ人になり

大意、（姫ハ尚語ヲ續ギテ）右ノ通リ優劣ナキ故、五人ノ中其ノ見タイモノヲ見セテ下スツタ方ニ、其ノ方ノ御志ヲ一番深イト、思ヒ定メテ御事ヘ申シマセウト、御出ニナル五人ノ人々ヘ申シ上ゲナサイトイフタ。

よきことなり、とうけつ、

此は翁の答にて右のかくやひめの言を諾ひたる由なり。

大意、翁ハ、ホンニ夫ガ善イコデ御坐ルト承知シタ。

日暮るゝ程、例のあつまりぬ、人々あるひは笛を吹き、あるひは歌をうたひ、或はしやうがをし、あるひはうそをふき、扇をならしなどするに、翁出でゝいはく、かたじけなくもきたなげなるところに、年月を經て物したまふ事、きはまりたるかしこまり、とまうす、

例のあつまりぬ　例の　は例の如くといふを省きたるなり此の一句古本にはあつまりきぬとありて人々の二字なし抄本および小川板の本などには此の二字あれども上の句へつけては見難し下へつけて見るべし　○或はしやうがをし　しやうがは唱歌にて笛の譜をうたふことなり　○うそを吹き　口笛を吹くことにて嘯の字の意なり　○扇をならし　笛ふき歌うたふに合せ拍子を取りて扇子を打ちならすなり。‖さて斯く種々のあそびをなすは皆姫を誘ひ出さんとての業なり

○かたじけなくも　此は俗にもいふ恐れ多く有りがたき意なり王子貴人の斯かる賤が屋に訪ひ來玉ふ故にいふなり　○

きはまりたるかしこまりとまうす　きはまりたるは極りたるにてかしこまりは畏れ多き事といふ意なり、畏れ多き事のきはみといふなり、かしこまりの下なりを省きたるなり。

大意、サテ日暮方ニナルト、翁ノ家ニ例ノ如ク五人ノ人々ガ集ツタ、シテ其ノ人等ハ或ハ笛ヲ吹イタリ、或ハ歌ヲ謡ツタリ、或ハ唱歌ヲシタリ、或ハ口笛ヲ吹イタリ、扇ヲ鳴ラシタリ、思ヒ〳〵ニ色々ノ遊ビヲナシ、音ヲシテ赫夜姫ヲ誘ヒ出サウトシテ居ツタ、ソースルト翁ガ出テイフニハ、忝クモ貴イ御方デアリナガラ、斯ンナムサイ處ヘ年月長ク姫故ニ御通ヒナサルヿ、誠ニドウモ極メテ畏レ入ツタヿデ御座リマストイツタ。

小説

○水仙花

鐵筆將軍

第四枝　のどけき風に綻ぶ花

誰か富貴に生れて富貴に日を送る者を見て、幸福なりといふか、誰か貧賤に生れて貧賤に世を渡るものを見て、不幸なりといふか、この幸なり不幸なりといふに、決して過去と現在とのみを見て斷定し得へきにあらざるなり。古人は言ひぬ、棺を蓋ふまであらざれば、其の人物を識る能はずと。作者もまた之に倣つて言はんとす、墓石を見るにあらざれば、その幸不幸を判ずる能はずと。人生五十、又七十、その間の世渡り中には、或

はつらきこともあらん、或はたのしきこともあらん、或は餘りに愉快にして狂せまくせんとすることもあらん、或はあまりに不愉快にして死なまくせんとすることもあらん。然れども是等は、彼の世渡りての大潮流中の小波のみ、微波のみ、いかでかことごとしく言ふにしも足らん、乃ち是を見て、直に幸なり不幸なりといふことを得ん。　本篇の主人公直江の仙がこれまでの經歴を見れば、實にあはれなるもの、如くにぞある、また不幸なるもの、ごとくにぞある。　然りあはれなるには相違なし、不幸なるには相違なし、されども終局…………最早言はざるべし、言へば乃ち「己に解ッた」と讀者に巻を擲たれん。

お仙の父は凡そ三ケ月ばかり病院にありて療治したるが、國手の療法、阿仙の看護、共に其の宜しきを得しに依るか、竟に快復しぬ。　その時の阿仙のよろこばしき感情は如何ばかりなりしぞ、禿たる筆もて書き立てまくするも、なかなかにおろかなるとなり。兎に角お仙があとにて――ヅットあとにて、或人への物語の中……………彼の時よりぞはじめて花のうつくしきを知り、月のおもしろきも覺え、月影に花見る夜半には、必ず浮雲の風のつらさの劣らざるべき死をも感じ、一聲鳴くなる月をながむる曉には、浮雲拂ふ風も、しかすがに無情のものにもあらざるべきをもさとりぬ――實にはじめて天地

自然の美妙をも感じぬ、とあるを見れば、實にもと思ひやらるゝなり。

偖父の病氣全く癒えたれば、阿仙も之と共に家に歸りしが、母も兎に角によろこびて、直にも快復の祝のしるしをせんといふ。父は之を制して、そも道理なれども別に急ぐべきにもあらず、我は久しく病室にのみ在りて、精神如何にも晴れやらず、阿仙もまさきることなるべし、卿も長らく留守してありしからに、同じくさることならん。然れば明日あたりは、家をば隣の人に頼み置き、三人して上野公園地邊にたのしく逍遙せんといふ。母も阿仙も直ちにこれに同じたり。

明日といはれたる日もはや今日となりぬ。三人は身づくろひして出で立ちぬ。病氣あがりの人の歩みの遲きあるにも拘はらず、麹町より上野までの道のかなりに遠きも拘はらず、樂しく語らひつゝ、行きし故か、間もなく(三人の心にて)上野に達しぬ。さて彼處此處をそゞろありきして、互に樹木を品し、花卉を評し、凉蔭に憇ひ、青苔に坐し、一時間ほども過ごせしと思ふ頃、雲の漲り出るありて、風一しきり吹きおちたるに、不忍の池の面の小波は、頻りに動き出し、追ひつ追はれつ、戯ふる、もいとをかしく、又蓮の葉、柳の枝なんどの、葉裏を見せて、往きつ返りつ、遊びつゝあるもいと面白し。アナ心地よや、アナかすしや、と語らふ間もなく、一聲轟く雷の音、それと同時に降り來る村雨、遙か

に見えざる築地の本願寺、日本橋の三井銀行なんども、霞がくれにそれと見えずなりぬ。此處には此樣して居られど、と三人は山をくだりて、下の汁粉屋に入りぬ。嗚呼天公何故に斯く察しなきや、たまさかの鬱を散ぜんとして出で遊ぶもあれど、直ちに雨もて之を退く、嗚呼天公何故に斯く無情なるや、とは三人の心の中に思ひしことなるべけれども、此の雨ありしが故に、窈窕たる淑女と、剛毅なる君子の好逑を見るに至りたり、と後にて思ひ知られたり。むかし支那の或る詩人は、雨ほど情あるもはなし、と吟じたるが、恰も本篇のためにいひしもの、如し。

附記

一寸申上候。先月一度御目もじ致さしど、實に千秋の思これあり候。實の處小生儀三日の日より申上るも恐ろしき急性肋膜肺炎てふ病に冒され、再び諸君にお目見え覺束なくと案じ候位に御坐候。爲めに御無沙汰仕候段、幾重にも御推もじの上御容赦下され度候。勿論斯く申上げ得る樣に相成り候間最早大切な命には別條無レ之候へども、なかなか病床を離るゝ迄には至り不レ申、何卒御心配下され度偏に願上まいらせ候。

隨つて此度は「水仙花」の續きのみとし「刺客」の方は

あとへ廻し可ﾚ申候間、何如にも御尤と御承知下さるべく候。而て醫師の療法もよく細君の看護もよく候間不日全快疑ふべからず、其時おそ念に念を入れ、恐ろしく見事に「刺客」の續きを以て諸君にアツトいはせ可ﾚ申、諸君も何卒御目さまされて御待ち居り下され度候。まづは右申上まいらせたく、あら／＼かしこ。

明治廿二年六月八日熱海春靄樓上に於て　鐵筆將軍

讀者諸君御中

再伸。右書狀は男の文の樣で又女の文の樣なるは、諸君の中、男の御方も女の御方も有ﾚ之候間、雙方に通ずる樣、氣を利かしてかきたるものにて候。

○教育小說　烈夫傑女譚

ペスタロツチ原著
山縣悌三郎重譯

第四回　室家の樂み　妻子の睦み

此日傑特留は烈奈度が城より歸り來ぬ中に、土曜日の課業を爲し果てんとて急ぎけるが、幼兒の髮を梳り又辮み合せ、衣服の汚れを洗ひ、破れを補ひ、室内を掃除し、つ其

間に父の還り給はん時謡ふ爲めとて唱歌を敎へゐるが、劣奈度が歸りて內に入れむ妻と兒女は聲を齊へて歌ひける。

天より降る靜けきやすミ　憂を拂ひ嘆を慰む　かなしむ人もかこてる人も　忽ちこゝろ長閑にいえん　日毎のつとめたえざる勞き　いとはゞあきぬわれやすまばや　苦樂を忘る尊きやすみ　來りて胸にすまへやすまへ、

劣奈度は眼に淚を浮べ『神必ず汝等に幸福を降し給はん。』

傑特留夫に向ひ『我夫よ、人として心のやすみを求むるときは、此世も極樂となり侍らん、君にも正しき道を守りて必ず慾に耽り給ひそ』

劣奈度『我若し此世にて天堂の樂みを得ることあらば、是は皆卿の賜なり、我氣息のあらん中は、我が身の破滅を救ひたる卿の恩を忘るまじ、幼きも弱も亦爾なり。ヤヨ兒女等よ、汝等眞の道を守り母の足跡を踏みねかし、必ず行末昌へなん、』

傑特留は少時ありて『良人今日は中々に善き元氣にて在すなり、善き事の候ひしか。』

劣奈度『我今日御城に參りて領主に見え奉り萬の事首尾よかりき、最に領主許參るを厭ひたるを、今から思へば小兒らしくていとはづかし。』

傑特留は再び編み物を始めながら、『事の濟みたる後にて兎せむ善かりし角せば宜か

りしと賢くなるはいと易かり、先づ見參の始めより一々に語り給へ。』

劣奈度『今日は土曜日なれば家事の整備もあるべき故緩々話を聞く暇はあるまじ。』

傑特留は含笑みながら『四邊を看め給へ』といふ。

此時リツチー出で來りて『父君よ、母樣の整備方を急ぎ給へば、アンニーと妾も助け參らせ通例もよりは早く片付侍りぬ。』

傑特留は今は用事も果たれば、『速に告げたまへ』と頻りに乞ひて止まざりけり。

劣奈度『サテ領主の君は我が父の名をさへ訊ね給ひ又我が住める町の名と此家の番號まで一々に問ひ給へり。』

傑特留『否々妾は尚ほよく知り侍り、アル子ル主はさることより尋ね始め給はむ。』

劣奈度『何より始め給ひしか、推し見られよ。』

傑特留『君先づ領主を拜し給へば、アル子ル主は遠方の處よく來たれり、勞れつらめと會釋ありしと覺え侍り明白地に告げ給へ。』

劣奈度『卿は如何なる魔法にてさることを知りたるや、我實は其始めより告げざりし。領主は會釋し給ふ後、汝尚ほ予を畏るゝや、と問はれければ、我恭しく一禮なし主公田舍人の禮知らぬを恕し給へと詫ければ、アル子ル主は可々と笑はせ給ひ、爾

萄酒を盛りたる盃を我が前に置き賜へり。』

傑特留『夫れ見給へ曩に曰たまひたる談と大なる差ひ侍らずや、シテ其御酒は暫時に飲み乾し給ひしならん。』

芳奈度『否とよ、我羞しきと新婦に異ならず、手にだに取らでありけると、主公が頻りに勸め給へば、固く辭ふも無禮なりと思ふものから、主公の健康を祝ひつゝ飲みけれど、主公が眼を定めて守り給へば鍾子は我が手の中にて震へにきと覺えたり。』

傑特留『そは吾夫の心に咎め給ひしならめ、されど貫慮の間もなく落付き給ひしか。』

芳奈度『アル子ル主のいと懇に待遇し給へば、やがて心も落着たり、偖主公の曰給はするには、きびしく働く人の酒好むは固より左もあるべき事にして絶えて咎むべきにはあらず、されど酒の爲めに愚になりて家族をも忘れ行末をも忘るゝは歎くに餘ある事なりと諭の言に、我は胸に釘打たるゝ心地せり。領主は再び貧しき人困苦に迫るときは、慈仁ある人に事情を告げて救を求めんとする勇氣もなく、又その思慮もなく却りて疫病神の如く忌み避くべき惡人の手に陷るはいと歎はしき事ならずや。泥工よ、汝が妻も汝の如く勇氣と思慮のなからんには、困窮の末如何なる辛艱見んも知れず、之を善く思ふべしと曰ゐたり。』

傑特留『此處の番地を問ひ給ひし前に、斯る事共曰給ひしを、何とて妾に聞かせずして半途より談し給ひしや。』

劣奈度『我れ卿が勇氣に負りて傲慢にならんことを恐かひ、主公が稱賞させ給ひたる言をば告げ知らせざるこそよけれと思ひき。』

傑特留『吾夫は爾思ひ給ふか、妾は生涯此一事を愧かしからずと思ひ侍らん、さてアルネル主は其次に何事をか問ひ給ひしや。』

劣奈度『夫れより建築の事につきて様々と尋ね給ひ、又費用の事も一々に問はせ給へば、石灰砂石などの運賃までいと細かに取調べて申し上げたり。』

傑特留『計算差はあらざるか。』

劣奈度『此回は我如何にして誤算のあるべきぞ』、といひて衣夾の中に銀貨を鳴らし『如何ほど前金を貸し給ひしか猜し見よ。』我等夫婦が斯く數多の銀貨の鳴音を聞くは近来絶えて無き事なり』、と云ふを聞きて、傑特留は思はず大息なしけるにぞ、吾妻左までに歎き給ひぬ、我今よりは行末の事を慮り、成るべく金錢を蓄へ、又今までの如き苦に遭はせまじ。』

傑特留『是は實に天にいます神の妾等を憐み助け給ひしならん。』

労奈度『我等のみにはあらず、村人等の此度工事にあづかるもの少からず、主公は多く子を育てる父十人を擇び出し、此建築の職工として、一人毎に一日二十五「クロイチェル」の賃錢を賜ふとかや、實に有がたき仁惠ならずや。主公は此人々が何人づゝの子を育てるや、職業は何なりやといと丁寧に問ひ給ひ、其中にて生計の最も困窮にて幼き兒を育てるものを擇び給ひき。又我とひとしく困難なるものを知らば申し出でよとありければ、我ヒューベル、ルーヂーが事を申し上げにき。されば彼の人も今より一ケ年は工事にありつきたり。』

傑特留『そはよくぞ計ひ給ひたれ、ルーヂーは吾が家の馬鈴薯を偷み取りたれども彼の人の困難を座ながら見んは人情ならず。』

労奈度『我貧しく便なき人に何とて恨を含まんや、彼が家族の艱難辛苦は實に得も言はれぬばかりなり、されど二三日前にもルーヂーが馬鈴薯の畠にあるを見たれども我知らぬ態して行き過ぎにき、彼が情況を熟々見るに、眞に饑渴に迫れる樣なり、我等貧しけれども幸に何時も食物に事缺かず、是を思へばルーヂーはさぞ辛酸からん。』

傑特留『君の志はいとありがたかり、されど盜みをしたればとて困苦を免かるべきにあらず、却て其身の苦に心の憂を增し加へて二重の不幸になるものなり。』

劣奈度『それ眞にさることながら、人飢に迫りて堪へ難かるに、眼の前に食物ありて其食物の大抵ならず畠にて朽つるを知り、又牛馬にても食物に事かゝずと思ひなば、其儘にして手を觸れざる人やはある、斯る人は常人にはあらざるべし。』

傑特留『斯る時に我が心を制するはいと爲し難き業ながら、その爲し難きを爲し得ずば、如何でか心の潔白を保ちて永く幸福を受け得んや、そは先づ措きつ、君は今日職人どもの働作を見廻はり給ひしが、妾はヂョーセフが今日また酒屋に赴きたる樣子なるを未だ君には告げざりし。』

劣奈度『それ心よからぬことかな、村長が招きたるに疑あらじ、我れ家に歸るさに職工等に打ち語りたる折、彼れ心得ぬことをいひにき、若し酒舖より還りたる後ならば、いよ〳〵心安からず。』

傑特留『何事をか申せしぞ。』

劣奈度『ヂョーセフが我に向ひてシュウェンヂ石坑より出づる石は會堂の壁を造るには此上なき良材なりと勸むる故、近傍の地には多く在る燧石こそ遙に勝れりと我が答へと打ち消して我は利に鈍ければ身の爲めよきことも得知らずといひにき、されど此シュウェンヂ石は砂を含み軟にして此度の工事には少しも用ひ難かり、若しヂョーセフ

が村長と打ち語らひたらんには如何なる巧みのあらんも知れず、我を陥れんとて斯くいそせしにはあらざるか。』

傑特留は尚ほ夫を誡め『ヂヨーセフには都て心を縦し給ひぞ、彼は信ずべきものにあらず。』

岑奈度『彼等如何に謀りさりとて我れ容易く欺かれんや、アルテル主も礎に砂石は用ふべからず、砂石は朽ち易く、壁の傍に牛馬の糞を積み馬厩より流るゝ下水に近ければ硝石の爲めに腐蝕んと曰給ひき、主公が何事にも精しく通じ給へるは實に感ずるに餘りあり。斯くて主公は我れと打ち語らひ給ふ折、オーベルホーフェン公の來ましたりと近竪の者申し出でければ、吾れ辭別を乞ひ奉りて重ねて參上仕らんと申せしを、主公には笑ひながら否々我が爲しかゝりし事は爲し了るを好むなり。又一人の人と相語る中は外の人とは語さぬなり、斯く些少の事に逢ひて爲る事を中止するは爾が舊き癖ならんと曰給ひければ、頭搔きつゝ黙りてあればよきものをと自から思ひき。』

傑特留は笑ひながら『其は今日の見參こそ誠に好き首尾にてありつれ』とて、仍ほ細々と語合ひけり。

批評

○新著百種の堀出しもの　（小本一冊八十二頁定價十二錢　東京神田區南乘物町吉岡發行）　鐵筆將軍

新著百種の第二號出でぬ、是は饗庭篁村氏の堀出しもの。謹んで拜閱せしに、餘程奇妙なものなぞある。先づ表紙はお定りもの、中に、椿の花を糸にて繋ぎたる、凝つた樣な、凝らぬ樣な、黒う人にも將さ白う人にも向くといふ趣向。一枚開くれば、同じく椿の花を薄鼠色に出し、其上への題字、是も頗る面白し、但、ワクを取除けば尚面白かるべし。それから御自序、辻講釋を聽くが如し。次に紅葉山人の熱に浮かされしと思しき「作者曰、」能くも讀者を馬鹿にされたり。偖是から愈々本城、出直りてもの申さん。

最初に書き出されたる夕景色、妙なり、詩の如し、畫の如し。第十四丁「暫くは眼を轉ぜず足を移さず立ちしまゝにて其身は立ちしまゝある事をも忘れ」云々の句旨し、余も亦且つ讀み且つ評して此に至り、暫くは眼を轉ぜず、筆を移さず、視つめし儘にて自分ながら視つめし儘なることをも忘れたり。第十五丁、狂主人公の語に「川の流は定めに知れ桑畑未だ海ともならねど早く我家は衰へ變りて」、とか第十七丁「此川もまた名を更るう水も逆ふ流るゝか濁らで此まゝ清むものか此川に立寄りて水に姿を映すも耻かし」な

どの如きは、人物に相應からず、此類他にも非常に多し。二十一丁四郎太郎の母の口より「……取分けて孃さんは私なりお前なりに目をかけて下さつて……」と言つてある漢學者の所謂伏筆、いつも相變らずの緻密な御趣向、感服の外なし。二十六丁に四郎太郎が「今夜飯をやらずに寐さば明日の朝炊く世話もない少しの我儘だ勞れて直に寢られるだらう」ツて飯を食ずに寐る、馬鹿氣樣が餘りに甚い、殊に十九丁の「腹も定めて空いたであらう夕飯の支度をして置いた」といふ母の親切に映ぜざるに非ずや。四郎太郎寶を掘らんとして、いくら掘りても出でず掘り上げし土に喰ひつきたる程なるに、直に又「鍬をかたげて平生の如く欣々然して仕事に行た」とあり（三十八丁）「に平生の如く」丈にても已に怪しからぬに「欣々」然してとは何事ぞ、其樣に感情の薄い人間なら、ヨモ氣狂にはなるまいと愚考仕る。東京に出し置いたる柿崎大畫の娘お調が、四年目にして歸り來る「道々も迎ひの人數ほとんど一村を擧げて出で」たる位なる騷ぎの中にお調が、飛んで來た狂四郎を摑へ「四郎樣お調をお忘れか情ない如何して此樣な有樣におなりなされ？若しお調でござりまを」（四十九丁）とは何等のとぼけた臺辭ぞ。六十三丁より六十六丁に至る婚姻に就きての長談義、下拙ならざれども欠伸出でたり。七十五丁婚姻の夜、大風雨にて椿の木覆へる、お調が「此家の神木と夫婦が大切がる木が覆へ

りしハ不吉の兆か」と嘆ぜる一頓頗る妙。

「作者曰」にハ此小説ハ涙を主眼とせる、成程大膽に名乗りあげてあれども、如何に讀んでも涙が出でざるが不思議なる、否ほと／＼涙がぶらさがりさうになるなれども、直に又吹き出す笑の爲に打勝たる、ぞおかし。元来泣くべきの事實も、吹出すべきの筆を以て之を敍すれバ、到底讀者をして泣かしむるに足らざるなり。本書ハ實に其通り、誰か之を讀んで吹き出さゝる者あらんや、誰か之を讀んで泣く者あらんや。饗庭君よ、以後少しく心召され、口さがなき京童ハ「篁村さんの愁嘆物ハ、猿芝居の愁嘆場の樣だ」といひますぞへ。序に又言ハねバならぬことがある、乃ち本書の趣向ハ「古今小説」中に於揚賓生が母に孝事して、竟に夢の告により、寶物を堀出せし一章に真似られたるにハ非ぜやといふ事。マサかとハ思ひ侍れども、御參考の爲めに斯く申上る。

まだある、乃ち御自跋、是も殆んど辻講釋同樣、併し始めのより一頁ほど短いだけが有難し。とはいへ「諄くも自跋と出かけしを葉數を殖す窮策など、禁句は云ふまい」と仰せられてあるが如何にや。妄評多罪(にもあるまじ)

○硝烟劍鋩　殺人犯　(小本一冊百十七頁定價　京橋區南鞘町正文堂發行)

南翠外史が文章は、成程豊富です、南翠外史の意匠は、成程緻密です。が、其小説は重に寓意より成り立ち、其れが爲め通常の小説を讀む積りで之を讀めば、隨分に無理こじつけと思はるゝ所が多く、隨つて讀者の感情を動かす程にゆかぬのは殘念なことです。然るに此殺人犯は、別に其寓意の爲めに制せられず、豊富な筆を縱横に奮ひ、緻密の意匠を自在に組立てられてありますから、其面白き事は實に一番又掩ふことの出來ない程。而て特更に「此小説は涙を以て主眼とす」とも斷つてありませんが、涙が出ます、又別段に「此小説は汗を以て主眼とす」と名乘かけてもありませんが、實に汗を握ります。且又やれ「三年かゝつて作つた」の「有丈の腦味噌を絞り出してかいた」のと記してもありませんが、實に此通り、流石は南翠外史。

○智識第一號　（毎月二回發行定價一冊金五錢東京小石川區江戸川町智識雜誌社發行）

此度渡邊修二郎氏が主筆で、智識といふ雜誌が出ました。其期する所は如何と問へば、有益にして面白き雜誌たらんとあります。いかさま有益にして面白き雜誌です。小説欄内にある朶撫柳散史の「紳士の奇遇」てふ小説は、殊に望みがあるものです。

第六號ふ掲載せられし皇朝記事文栞の批評につき、友人五溪山人所見を筆して余に示さる、其說温厚にしてよく著者の意を發揚するふ足るものあり。余依て山人に慫慂して貴社に投寄することはなせり。

秋香野史

○皇朝紀事文栞の批評を讀む

本誌第六號に掲げられました、本書の批評に(吾人には本書が果して其んなに大なる價値を有して居るものか、何如しても解りません)といはれて有りますが、一應はさやうにも思はれませう。なれども、能う考へて御覧じろ文章は本躰さへ、出来ましたら、うはつらの姿はどのやうにも成るものです。而て見れば例言に云はれて有る事は無理ならぬことです、どうして價直の無いものといはれませうぞ。又(吾人の好んで本書を繙きましたのは、其の註釋にあるのです、註釋さへなければ原書を讀んだ方が餘程宜しいですもの)といはれて有りますが、成る程原書に誤字脫字の無いものなら、其れを讀んだ方が宜しいでせうが、本書に引用せられました原書は、二三を除けては誤脫の甚だ多いものでして、讀んでも解らぬ事だらけですもの。而て見ると、吾人はやつぱり充分に校訂の出来てある本書に就いて見るのが、利方で捷徑です。且有職に關係しました事は(官職物名などの文意にかゝはらぬ所は注せざるが多し)と云はれて有りますもの、、是れ

ぐらゐの註釋が無うては解るものではありませんが、これは其邊に注意せられましたので、自然と註が多いのでせう。　而て形容詞、動詞の類の註の無いのは例言の末段に「天爾袁波の係り、結び、――などをも諭さまほしく思ふ物から、さてはいとくだ〳〵しうなりぬべく、はたさるかたには便よかなる書も、まゝあなれば、さのみはとてもらしぬ」と云はれてありますが、成る程これらの註は、僅少の標註や、傍註ぐらゐの事で、能く解るやうなは成りませんので、此類の事は活語の書に讓つて、略せられましたのは（文意の點から云ひませうとも）當然の事でして、あながちに例言と矛盾して居るとは云へますまい　然而して本書に引用せられました書中には、枕草紙、徒然草の二部は、古く注したものもありますが、自餘は注したものがありませんですのに、如何解り能う成りましたのは、全く註釋の出來ました故です。　別して日本臣民たる者の心得て居らんではありません御即位、大嘗會などの御儀式の概略も、こまで能う解りますから、吾人は此書を以て有益なもので無いとは見とめません、相應な有益の者と思ひます。

寄書

○フオスカー婦人の傳　　陵北女史抄譯

颶風吹き、波濤怒り、雨さへバラ／＼降りしきりて、其凄さいはん方なし。唯見るシヤーロツト、フオスカーは、――幼き可憐のフオスカーは窓端に其身を寄せ、しきりに眼を外面の方に注げり。時しも深夜のことにしあれば、固より顔面容姿は見分かねど、時々輝る稲妻に、摸様は左こそと推されたり。外面に生ふる老樹の梢に觸る風の音に、連れて聞ゆる悲歎の泣聲、立つかと思へば又坐り、坐るとたんに泣き沈む、其容体ぞ憐なる」

今しもフオスカーは、其父の――漁夫なる父の身を案じて悲歎に沈みつゝあるなり、其父は斯の甚しき風雨にも拘はらず、尚ほ職業に出で居しなり。フオスカーは晩飯さへ食べとふせず、父の爲めに氣をいらち、窓端に臨みて上帝に禱りしなり、ア、暗礁にや觸れもせん、乗りたる船や覆りもせん、助け賜はれ恩愛の神よ、運命強ふれるが父よと。

尚ほしも外面に身を寄せて、空をまらまへ數息したり。

俄かに思ふよしありてや、ツト身を起して仕度を整へ、忽ち外面に跳り出でたり。優にやさしきフオスカーも、今や勇敢の氣象を見はしたり――少女の身にてありながら、男勝りの大膽さ――神の恵みに依頼して、斯くまで凄き風雨の中心に、物ともせずに飛び出したり。

爰處は瑞典の東部に當り、ボスニヤ灣の海岸にて、今日もしフオスカーの父は、漁業の爲めに船出して、不意に風雨に逢遭し、歸航の針路を失せしにや、將た暗礁にも觸れしに

や、何時も夕刻には歸宅するの習慣なるに、此日に限りて未だに歸らず。内には母が病床に憂きを忍ぶるあはれの始末、今幸に母もスヤ〳〵と睡りに就きたれば、フオスカーは決心して外に出で、まづ父の身上如何と探ねしなり。時しも一千八百二十八年八月の下旬にして、フオスカーが纔かに十三歳の秋なりけり

　鳥の翼の暴風に漂ふ如く、彼處斯處に馳せ廻りつ、フオスカーは、いと熱心に父の行衞を探せしが、悲しや、人影だに見えぬなり、樣子とて毫も知らぬなり。風はいよ〳〵強く吹き、雨はます〳〵強く降り、其凄まじき言はん方なし。忽ち遥かに見ゆる燈臺の光りに映つる難破の一艘、若しや夫かと打案じ、飛ぶが如くに驅け寄りて見れば紛ふ方もなき、其船こそは吾父の………ヤ、併し船には乘人なし。再び吃と眼をそゝぎ、海上殘る隈なくも、見渡せば遥か向ふに當り、何やらん漂ひ浮ぶ者あり、つく〴〵視れば人！忽まちフオスカーは狂氣の如く立ち騷ぎしが、さてあるべきにあらざれば、其儘我身を跳らせて、ザンブと海面に飛び込みたり。かよわき女の腕を以て、など荒波の中を凌ぎ得ん、フオスカー自身の行衞さへ忽ち知れずなりにける。

　夜は曉けぬ。母は重き頭をあげ四邊を見れば、夫も我娘もアラ悲しやと泣くばかり、如何にしつらん、如何にせんと、瘠せ衰へたる身を以て、起きあがりつ、四方を見廻し、暫しためらふ折柄、郷黨ども三四人、夫と娘の死骸を並べてそなたにかき入れたり。偖はと歎く母よりも、郷人原は、寄りつ、たかりつ、介抱に力を盡せし甲斐ありてフオスカーは

目を見開き、漸次に息を吹き返す、然れども老父は其まゝ、甦がへらざりしぞ憐れなる。父の命は救ひ得ざりしも、フオスカーの孝心深きその夜の始末は、いつまで草のいつまでも、後の美行とともに朽ちざりたり。

此所は憐れな賤しき部屋にて、此の孝女なるフオスカーは、病の床に打臥する母の側にいとまめ〳〵しく侍づくものゝ、行き越し方を案じつゝ、何となふやつれて見えたり。見よ、彼所の庖厨には喰ふべき一片の麵麥だになし、此處の爐には焚くべき一束の薪さへなし、されども孝女の鐵腸は、依然として變ぜず、とはいへ、如何せん母の病の藥代なき。をフオスカーが家の近邊に、ボートンとふ一個の農夫ありけるが、當時其家に宿泊したるサレーとなん呼べる旅人は如何なる用向にて當地に在るにや、時々海邊に散策を試み、フオスカーが家の邊りを逍遙するも度々なり。這は上帝孝女を憐れみ、或る媒介を爲をものにや、聞けばサレーは那威なるハマー州の寫真師なりとか、フオスカーの容貌の優れたるに心移り、或日ボートンの下僕もて「某事は那威の寫真師にして、此度用を帶びて當地に來りたるものなるが、今しも歸らんとするに臨み、御身に一ツの願ひあり候に、御身某に一セカンドの時を貸して、御身の容姿を寫さしめたまへぞ、ボンド(金の名)を以て之に報ひん、許させたまふや如何にぞ、と、フオスカーに申越したれば、フオスカーは熟々思ひ廻す樣、我今母の病に際し、藥を求むる代さへなし、不理にボンドを得るにはあらじ、まさ身を汚すにもあらじ、固より寫眞しておのが身を世間に曝すも、面目なきにし

もあらねど、事の緩急已み難し、それにて母の病を救へば、之れに勝したる歡あらじ、と乃ち諾して之れをやれば、サレーは悦びて出できたり、フオスカー少女の容姿を寫し、ポンドを之れに與へつゝ、旅装をなして歸りけり。

あとにフオスカーはポンドを得て其喜び云はん方なく、愈々母の療養に餘念はなかりしが、日増に痊ふる老母の疾病、日ならず本復なしにけり。其後フオスカーはポートンの家に雇はれ、耕耘の助けをなしつゝ、母子ともに微かなる月日を送る内にも、終始一の如く孝養を怠らず、暇を得る毎に物の理を窮むるに熱心し、讀書の業につけても一郷に名あるものとはなりにたり。

光陰に關守なく、昨日と過ぎ今日と去りて、早や一千八百三十四年に及びぬ、明くる春の頃よりして、老母は又も心地あしゝとて打伏したるが、天運最早のがれがたかりけん、其年九月といへる月に、あへなくも身罷りぬ。フオスカーの愁歎は實に想像の及びがたき程なりしかど、如何に詮術もあらざれば、イザ之れよりは精出して、フオスカー一家の名を擧げんと、日毎夜毎に勵みつゝ、只管向途を案じける。此時よりして身はポートンの家に寓り、餘念なく力を盡して、ポートンの爲めに働きたるが、或る日のこと、思はぬ先きより郵書を齎らし、フオスカー宛てゝ來りしかば、何事やらんと打呟き、手に取り之をひらき見るに、

フオスカー孃よ、御身は拙者と見識らざるべし、否な拙者の姓名さへ尚ほ識らざる

は勿論なるが、拙者は之れ那威なるベルゲン州の一男子、名をモンタナ、スコツトと呼べるものにて、此度おん身に書状を寄するは、即ち御身と婚姻を結ばん爲めにて候ふなり。拙者は曩に御身の寫眞に接し、日に戀戀の情に耐えず、如何にもして御身と婚姻せんものと、日に夜に思ひつゞけ候ひしが、此頃或る方を問ひ合せて、始めて御身の境遇を知り得ぬ。おん身今年十九歳にして、未だ定まれる配偶なし、イデ拙者と婚姻せられなば、御身の利達も此上やあらん、拙者は州中に名たゝる豪族、若し御疑念の晴れやらずば、夫のハマー州のサレー氏(寫眞師)に御尋ねあらば委細申聞け候はん。色よき御返事をたまはれかし。　あら〳〵。

チヨイトあなたフオスカーは色よき返事するでしやうか。　さうですね、妾はするだらうと思ひます、あなたはどう御考へあそばします。　さうでございますね、妾はしないだらうと思ひます。　ヲホヽヽヽ、それではかけをしませう。

○佛國に於ける婚姻

石渡宗一

造化の人を此世に生ずるや、之に負はしむるに天然の一大義務を以てす、即ち人類をして互に生殖し互に繁榮せしむ、然して此義務を盡さんとするに、一定の法則なかるべからず、若し此法則なしとせん乎、何ぞ萬物の長たる人類といふを得んや、何ぞ禽獸と異なる所あらんや。此法則とは何ぞ、曰く婚姻是れなり。

夫れ婚姻の事たる、上は造化に報じ、下は一家の經理を來すものなり、此故に決して忽諸に附すべきものにあらず、必ずや吾人は此點に向つて意を注がざるべからず、是れ余

が淺學を顧みず、爰に佛國に於ける婚姻法を論述し、以て讀者諸君の參考に供せんとする所以なり。然りと雖も此佛國婚姻法たるや、之を詳論するは數多の日數を要するのみならず、此法中或は我國の人情風俗に反し、或は我國の習慣に適せざるものあり、故に余が是を論ずるや、唯我國に適用するを得べしと信ずる一端のみに止むべし、讀者諸君乞ふ是を諒せよ。

婚姻は性法上定義を下すときは、男女性を異にする二人の者、其結合及是より生ずる自然の關係に、德義の生質を與へんが爲め約束する所の永久の會社是れなり。故に哲學上よりいふときは、男女二人其結合の關係にして、二人間に約する會社なり○人定法より論ずれば、此の如き會社は、其成立の爲めに法律の規定する條件を具備するとえに非ざれば、決して婚姻を組織せず。即ち佛民法は規定して曰く、婚姻とは男女の二人が或る法式に從て約する所の結合をいふと。故に此結合たるや、唯に子孫を繁榮せしむるの目的に限らず、假令子孫を繁榮せしむるの目的及繁榮せしむべき能力を以て爲さゞるときと雖も、亦男女結合の後同居せざる場合と雖も、法律の規定したる法式に從ふときは、以て婚姻を成立せしむるを得べし。若し之に反して、婚姻は子孫を繁榮せしむるのみを以て目的とせば、大なる不都合を生ぜん、例せば六十年以上の男女の結合は婚姻といふを得ざるに至らん、何となれば人既に老ゆれば子孫を繁榮せしむる目的を達し得ざればなり、彼の嫁して三年子なきものは去るべしといへる戒言は、蓋し此誤謬の思想より出で

しならん其れ然り、故に左に述ぶる條件にして具備せるあらば、婚姻と稱するを得べく、而して權利義務も是より當然生ずべきものなり。

今や婚姻の成立に如何なる條件を要せるやを見るに、佛國立法者は三個の條件を定めたり。

第一條件。婚姻をなす所の男女、共に民法上の性命を獲得し、而して各其性を異にする事。

第二條件。契約者の承諾ある事、即ち契約者相方は承諾を爲すの能力を有し、且つ夫婦となるを承諾する事。

第三條件。嚴格なる式に從つて婚姻の執行をなす事。

以上三個の條件具備するときは、婚姻は當然成立し、法律に定めたる離婚の原因に依りて之を取消すとか、又は之を無効とする裁判判決あらざれば、決して之を打破るを得ず、從つて婚姻より生ずる効果を造成す。之に反して以上三個の條件其一を欠けば、假令裁判言渡しあらざるも、婚姻なきと同一に見做さるべし。乞ふ此三條件の大略を述べん

第一條件中に曰く、夫婦共に民法上の性命を有せざるべからずと。故に昔時に在て准死の刑を受けたる者の婚姻は成立せずとなせり。是れ刑罰に因て民法上の性命を失ひしものなればなり。然りと雖も、此准死の刑たる佛國革命の際之を廢せり、故に今日に在ては、宗教を職とするに由て結婚せるを得ざるものに適用す。

又曰く、男女其性を異にすべし。故に其性を同ふする男子と男子、又は女子と女子との間に約したる結合は、決して婚姻といふを得ず、即ち婚姻成立せざるなり。然りと雖も、生殖器の不具、或は生殖器の毀損ある場合と雖も、苟も是れ男なり、是れ女なりと認め得るときは、婚姻は成立す、何となれば生殖器不具なるも、男女即ち異性のものなればなり。

第二條件。契約者の承諾ある事

婚姻の成立せるには、契約者互に妻となり夫となることを承諾することを必要なり、此條件の必要なるは、他の契約と同一なり凡て契約には承諾を必要とす、此承諾なきときは婚姻も成立せず、是に於てか佛民法は婚姻も一の契約とし明記して曰く、承諾なきときは婚姻なしとすと即ち之を例せむ、甲男は乙女を妻とする意志なし、乙女は甲男を夫とする意志なしと云ふ場合の如き、全く承諾なきなり、全く婚姻なきなり。

注意。此承諾の有無を、承諾の瑕瑾と混ずべからず暴行を加へられ、又は詐術の爲に承諾せしは承諾なしとすべからず、承諾の瑕瑾あり、故に之を裁判所に訴へ、以て婚姻を取消すことを得れども、當然婚姻不成立として無效となすを得ず、是其區別也。

此承諾なければ婚姻なしといふ原則より種々の結果を生ず。

第一結果、婚姻の執行ありて即ち其婚姻執行證書には、甲男と乙女と互に夫婦となることを承諾せりと證明してあり、然るに其實を問へば、夫婦の一方は承諾せざるものなるとき、例へば甲男乙女互に見合を爲せしとき、爰に来會せしものは其實甲男にあらずし

て丙なりし、即ち丙は甲に代て來り見合を爲せしと云の如き、或は己れ病氣の爲め、十分に己れの意志を發表するを得ざる場合、或は手真似を以てせるも、文字を以てせるも、意志を發表するを得ざる場合の如き、婚姻執行證書の如何に記載するも、夫婦間の婚姻は成立せざるものと見做さゝるべからず而して爰に論ずる事柄は取消すことを得る婚姻なるや否やの問題にあらず、何となれば隨意の承諾なき場合なるを以て、取消すことを得るや勿論なり、啻に取消すことを得るのみならず、取消の裁判を俟たずして、當然婚姻の効力を生せざるものなり、即ち證書僞造の訴へあるを俟て、當然無効となるべきものなり。」

第二結果、夫婦の一方が婚姻執行のときに際し、發狂若しくは瘋癲者なるときは、承諾を與へ得ざるものなれば、是亦不成立と見做すべきなり然りと雖も、發狂若しくは瘋癲も其程度階級は種々にして、全く事物を識別せざるあり、或は自己の財産を管理する能はざるも、婚姻の生質、婚姻の目的如何を了解し得るものあり、又發狂の種類に由て、時々發するあり、連續するあり、全く精神を喪失するあり、否らさるあり、其種類一ならず若し此等の者と雖も、精神通常の際に當て承諾せしものなれば、其婚姻は成立すといふべし、而して此等の事實に關する問題は、事實裁判官の決する所なり。

右に論ずる如く、婚姻に承諾は必要なり、而して我邦の婚姻を見るに、往々此承諾を缺く。唯兩親間に承諾を爲し、結婚せしむるものあり、爲めに朝に嫁して夕に離れざるべからざるの弊を生ぜり是實に一家族の利益、一社會の德義に背くものといふべし、故に一家族

一社會の德義を保護せんと欲せば、宜しく先夫婦となる者相方の承諾を求むべきなり。」

余は今や婚姻に必要なる第三條件を論ずべし。

此第三條件たる、婚姻執行の事たる、其方式大に我邦と異なれり、然れども其方式手續は如何にするも、此執行なくんば未だ完全に婚姻成立せりといふべからず。乞ふ簡單に佛國の婚姻執行のことを述べん。

即ち佛國に於ては身分役なるものあり、婚姻者に對して法律の名義を以て婚姻の言渡を爲すものなり。若し身分役は婚姻の言渡せざる乎、或は身分役の生質を有せざる公吏が、結婚の言渡しを爲したるときは、假令男女二人の會社を作ると雖も、決して此兩人の關係より婚姻の成立するものと爲すを得ず。故に宗教信者にして僧侶の面前に於て婚姻を執行するも、之を民事上より見るときは、(但し佛國に限る)婚姻ありと云ふことを得ず、故に身分役の面前に於て婚姻を執行すること、成立に必要なる第三條件なり。其他婚姻執行前後に於て爲すべき嚴格なる法式ありと雖も、是等の法式は婚姻の成立に必要ならず、因て此に之れを論せず。

顧みて我國を見るに、三々九度と稱する法式あり、又宗教上に定めたる法式あり、其手續一ならずと雖も、亦婚姻成立に必要なる執行といふて可なり。

以上論せし所を要言すれば、婚姻は契約者に生命を有して承諾を爲し、且つ式に從つて執行せしものをいふと謂ふに止るなり。

彙報

○皇后陛下御誕辰　去る廿八日は、實に我が嚴聖慈仁なる皇后陛下の御誕辰に當れり。吾人は謹んで其大長節に對すると同しく、ことほぎ奉りたり、必らずや全國民も擧つて斯く爲し奉りしことならん、特に又我か一千九百萬の女性は切に陛下の萬々歲を祈り奉りしを疑はざるなり。顧ふに陛下が盛んに庠序を設けられ、無學無識の婦女子をして高等の技藝を學ばしめ、以て今日の進歩を來し賜へるは、已に世人の熟知する所なり。又陛下が古來婦女子の弊風を洗滌し、其權利の在る所を知らしめ、以て婦女子をして今日の地位に立たしめたまへるは、已に世人の熟知する所なり。又陛下が親から養蠶の勞を取り、貨殖の重んずべきを訓へられ、以て今日の如くに農工商業の盛んなるを致し賜へるは、已に世人の熟知する所なり。又陛下が大に慈善の業を興し、以て感化院、慈惠院、赤十字社のごとき者をして、今日の如くに盛んなるに至らしめ賜へるは、已に世人の熟知する所なり。焉んぞ吾人の贅言を待たんや。記し了れば、瑞氣の自ら筆端を繞るあつて、恰も陛下の万々歲を表はるものゝ如きなり。

○改良改良又改良　改良改良又改良、改良の風は實に能く雜誌世界に吹き廻るものかな。多くもあらぬ我婦人雜誌の中にて、最も古き女學雜誌、之に亞ぐの貴女之友は、頃日何れも改良せられたり。吾人は其改良以前の者と、改良以後の者と兩々相照して見て、別段の相違あるを見出す能はざるなり。嗚呼改良は何が故に必要なるぞ。吾人之を或人に聞く、改良なる文字にして心あらば、必らずや黙せざるなり。と果して然るや否や。

○新奇なる鳥羽繪　軀幹線香の如くに細く、中腹最も瘦せたる紳士、大なる手もて醜婦の面を掩ひつゝ、頻りに車を急がせて馳せ去る。而して又眼孔の非常に大なる紳士あり、熱心に其車輪の跡を吟味しく居る。傍に一個の望遠鏡と、一個の顯微鏡と、又一個の恰も焰魔王の許より借り來りしと思しき淨玻璃鏡あり。其紳士の用に供せらるゝものゝ如し。嗚呼是れ何等の鳥羽繪ぞ、吾人不敏、其意を解するに苦しむ。

○情の居處　女學雜誌第百六十二號の外報欄内に、「男女の心臓」と題して曰く、「此頃男女の心臓を比較して計りしものありしに、男のは三百五十グラム、女のは二百六十グラムありし由ボストングローブ新聞に見ゆ。脳の軽重によりて智力を判断する論者は、今や女は其情も亦た男子に劣ると云はねば相ならざるまじ」と。嗚呼心臓は果して情の居處なるべきや。然らなりと教ゆる者ありても、吾人にはドウモ虫の居處がわるい。

○女生徒の品行　讀賣新聞は女生徒の品行と題して、實に左の如くに記したり。

處は神田明神下邊の小料理屋の二階、客は男女の差向ひ、男は年ごろ廿八九の官員風、チヨツキ丈白リンチルしる洋服を着て、八の字を生し、シガレトを吹しながら、連の婦人に對ひ「すね子さん今一つ召ありませんか、ジヤパニスワインがお否らビーヤを取ませうか、と云れてすね子は最大分廻ると見え、臉をホンノリ赤くし、目と少しトロンコにして、切下の前髪をうるささうに播退々ながら」もう澤山です、先刻から大分戴た升た。「左様でせう、何せ私のれ酌では……「イエ左様いふ譯ぢやありませんけれど……「けれど……怒られるゝらでせう。「アラ否でをよ誰も怒る人なんか有りやしませんヨ。杯をしたるゝい文句を並べ合た末、二人は勘定をしを其處を立出で、途中にて男は別れて立去りたり。女は夜中ながら更に聴する様子なく、左らでも裾短の衣類を一層高く掲げ、半靴をギシ／＼軋らせながら、本郷丸山の方へ行しが、暫くして一人の書生が丸山本妙寺前を通るに、夜中にてよくは分らぬが、年まだ若き一人の娘が、本妙寺の井戸傍にイみ、裾をクルりと巻り、今にも飛込みさうな景色のあるに棄置れず。最寄の派出所へ其よしを知せると直に巡査が馳行き見れば、未だ若い女の身にて、夜中斯様な處にイみ居らるゝは、何なる所存なるや、と尋ねられると、此新造は先刻料理屋を出た者にて、或る品行正しく済氣娘お茶ツピー杯は、鐘太鼓で探しても一人も無いと滅法評判のよい或る女學校の生徒にて、其の名を胸崎すね子(八十)と呼び、ラブ哲學とかいふ高尚なる學理に富で居る娘だけに、更に惡びれたる風もなく、私は今日學校より歸りに、教師さんのお供をして或お茶屋へ參ツた處、圖らず食醉まして足がふらつき、顔がほてり、此まゝ宅へ歸ると、例の親父の分らぬ屋が、女の癖に酒などを飲むは宜くない、杯と小言を云ひ、夫もよいが、以後他出を止らるゝ、教師さんのお供が出来ぬと困りますから、こゝにイみ醉を醒して居た處で

ありますと。ノロケど聞誤りさうな申立をしたが、其處が品行のよい女生徒と云ひ、巡査も更に怪まず、其まゝ立去りしとか。

又日本新聞に於ても、女生徒の品行と題して實に左の如くに記したり。

貴女の製造を以て自ら任ずる或る府下の學校は、頗る西洋主義を以て教育せられ、音樂舞踏の催しも時として聞くことあり。其學校の女生徒は固より嫻雅優美を以て文明の貴女たるに背かざるの風儀あるべし、と思ひの外、其平素の言行、實に意外なる者にて、所謂書生風染み、僕は二匹立の馬車に乘るの人に非ざれば決して婚せず、君は常に秘書官の妻君たらんことを希望せか、僕は異日女學校を興して其校長となり一生人の妻とならじ、妻は畢竟奴隷たるのみ、米佛の女流は今や戀慕の自由を唱導し、夫婦なるものを廢せんとの議論盛なりと聞く、何に苦しみて窮屈なる夫婦の約を結ばんや、男女固と同權なり、戀慕は我自由なり、昨日甲に戀慕し、今日乙に眷戀するも、誰か此自由を妨けん。など放言到らざるなく、其寄宿寮の部屋などには互に胸襟を開きての物語りを聞きなば、實に教育家をして女子の教育ほどむづかしきものはあらじと歎息せしむるよし。成る程佛米婦人の外觀は、其智識といひ、其言語といひ、交際の伎倆といひ、美術の藝能といひ、恰もパラス、アテ子の如く美なれ共、又其内幕に立入りて見れば、實に案外なる者にて、殆と戀慕の自由を實行しつゝあるかと思はるるといひ、女子教育の衝に當るの人は深く注意せざれば醜聞を新聞紙上に流すの恐れなしとせず、自己に醜聞を流しつゝあるは聞苦しき事にこそ。

又貴女の友五十五號に於ては呆れ果てたる令孃方と題して實に又左の如くに記したり

一己人の私行を摘發して、彼是批難を試むるは、餘り好ましからぬ事なれども、去りとて此の儘に見逃さるべきやは。遠國よりあたら子女を遊學せらるゝ方々は、何とか心配せられぬか。府下麻布區[redacted]町めし屋の樓上に下宿し居る[redacted]縣士族某々の三令孃は、男女同權說主張者にて、しかも基督教の信徒にて、其の上近所の高等なる女學校に通學し居らるゝ方々なるが、心の清淨潔白なる、氣象の活潑有爲なる、其の極遂には男女同衾說さへ憚られざること、見へゝ、現に六疊の室に、四人の貴公子と平氣に合宿し居らるゝよし。吾儕は「日本の女學」第十九號に「下宿屋の女學生」と題しゝ「高等女學生徒

は常に保証人の印影を捺したる白紙數葉を所持し居たり」「高等師範學校女子部にては常に閉扉の取手を失ふ」など、記載されたりしは、一時の戯れ事とのみ思ひ居たりしに、……偖も偖も……吾儕は只呆れ果つるのみにて外にせん術を知らざるなり、噫々。筆を擱かんとする時、到着せるは東京婦人矯風雜誌第十三號なり。開き見れば「男女混合の下宿屋」の弊害あることを痛歎し『警視廳より断然「男女混宿不相成旨の」法令を發せられて、此の惡風を苅除せられん事を所望を』と云はれたり。吾儕は滿腔の熱心を以て茲に大賛成の意を表するものなり。嗚呼我女生徒の品行なるものは果して斯の如くなるか、斯の如くに記るさるゝ、程なる乎、斯くの如くに論ぜらるゝ、程なるか、吾人は實に筆を投じて涙あるのみ。

吾人が斯く記し了るにあたり、一友人より又「咄々怪事」と題して左の如くに申越されたり。

横濱だの東京だの、只海岸ばつかりあるから明白には分らない、何れ海岸の邊にある女生徒の一人は、嘗て國許から學資と充分に送らぬ所から、時々月謝などに差支へ面を赤くすることあれば、終に新案を廻らして、十二三圓取の下宿に居る安官員の妾となりて、二圓の雇料で月謝を拂ひ、又は身の廻りを始末することに定め、日々其旦那と同時に家を出で、同時に家に歸るといふ樂み半分の學問を始めたるを、外の生徒が聞き知りて、甘い〳〵、妙案だ、大賛成〳〵と、追々其新案が蔓こり、今は二三十人も此組がありといふ。イヤハヤ」と繪入自由新聞に見えたり。嗚呼如何に困窮すればとて、苟且にも學生ともいはるゝものが、世の賤劣娼妓人面にして獸同樣なる娼妓と均しき行爲を爲すとは、實に長大息の至りなり。宜しく筆誅したまふべし。と。

吾人は實に爲す所を知らざりき、頻々此の如き奇怪なる報導に接して……。呆れかへりながら筆を收めんとする折しも、又もや衣物改めと題して、一友人の左の如く記し送るあり。(此度のは少しく風變りなれど、讀者又かと巻を擲つなかれ。)

衣物改め（きものあらため）　高等の教育を授くる某女學校にて、一日教師某女生に向ひて、「明日皆さ

ん衣裳を持て来てお見せなさい、盛岡さんハ華族様だから澤山お持ちでしようから、ようございますが」と申さまさる由。是れハ去る一日といふ日に、商業學校にて唱歌の大會ある時、美衣と有する令孃を来賓として出さんとの主意なりき。嗚呼美衣、美眼、美容……この美を養成せんとするか……容貌ハ天稟、誰を恨まむ、衣服ハ爺孃の賜物なれハ、美服なき時ハ人中へ出ると叶ハず。」咄々怪事敎師が衣物改めとハ。アー風變りな假名手本の序幕。」

是れハ近時に出来事に候。忠臣藏の兜改めと思ひ合されて妙なる心地すと、自失しなから驚き入候。

嗚呼吾人また何事とか言はん

廣告

國のもとゐ

第三號目錄　六月一日發兌

論說〇教育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂げんとするには如何なる
男子ハ嫁すべきか（バチツエロヒ、オフ、サイエンス）能勢榮君〇婦人の財產　法學博士穗積陳重君〇
病氣養生の話（續き）　醫學博士三宅秀君〇動物の保護同化（續き）　理學士、ドクト
ル飯島　小說〇園の梅（第三枝）　櫻塘學人〇高臺夫人傳　杉浦重剛君〇風
魁君　新造物者（第一篇）　瓠廼舍主人　文藝　のおと　中村秋香君〇花の說（續
き）深谷德五郎君〇土地〇亞細亞ハ世界の始め〇米國人も亦箸を用ゐる●濠
の變遷（圖入）木下邦昌君　雜纂　洲の土人〇蟻除けの法〇動物に於ける數の考へ〇家
主を店子の問答〇木の花の色を自然のまゝに保存する法〇婦人の頭髮〇あてこと〇
戶內の遊戲〇福澤諭吉氏の婚姻論〇山川浩氏の母堂逝く〇東京高等女學校に寄宿舍
の設なし〇割烹科習學の順序〇幼年取締職務概則〇新刊批評〇東京美術學校學科
課程　挿畫〇醫師瀧子と物語れる圖　武村耕
表　靄君〇奇人漂流の圖　小林清親君

一冊金八錢、六冊前金四十五錢
十二冊前金八十五錢、外に郵税
每冊各一錢、前金にあらざれば
發送せず、見本ハ壹錢郵券九錢
送らるれバ呈す

東京日本橋區馬喰町二丁目二番地

興文社

學術隨筆 博聞雜誌三十九號目錄

●論說○公民考 大槻修二○理學ノ說 巖濤韻司●歷史○安德天皇御行衞ノ異說（第六ノ續）○板額ハ醜女ニアラズ○歷史上ノ一奇談●傳記○鹽田三郎氏ノ傳○關口隆吉氏ノ傳●天文○雨量ノ增加○降雨多寡ノ原因○日曜万年表●地理○五十琴姬ノ御陵墓○平右馬允ノ塚○近江國大洞山下ノ奇塚○上野國川內村ノ古墳○越後國三面村○磐梯山中ノ具殼○石見國三瓶山ノ鳥ノ地獄●人事○英、佛、米三國代議士ノ種類○全國府縣會議員ノ統計○東京市中ノ人口、公民、直接市稅、市會議員ノ數○鐵道遭難ノ統計○能登國石崎ノ偽泣○支那人ノ慘刑○左キ、治療法●農事○培養蕈○麥芽ヲ以テ鷄ヲ養フ○家禽ニ於ル蕎麥ノ効用●工業○新發明爆裂砲軍艦○乘用尾助車○世界最大一ノ電氣燈○世界無双奇興ノ柱時計●諸業○柴笛○雜子笛○幕相撲ノ增加○緩倉●理化○爆裂火藥○天然生石鹼○亞酸化窒素ノ奇談●衞生○○酒精ノ人體ニ及ボス結果○茶ノ効用利害○煙草ノ煙ノ毒○癩病黴菌ノ純培養○視覺過敏病●文籍○勝伯ノ海陸軍歷史○源義經ノ願書○古代ノ訴訟文●貨物○無煙石炭○粉石炭ノ利用○薩哈連島産ノ石脳油○巨大ノ紙鳶●雜事○泥振○一頭二體ノ鷄○一頭六足ノ猫○八足ノ牛○百足ノ蟲○動物ノ毛○西洋蟻●廣告數十一件

●每月五日廿日兩回○一冊八錢○半年分十二冊金九十錢○八ヶ月分十八冊金一圓卅錢○一年分廿四冊金一圓七十錢○爲替ハ芝口局○郵券代用ハ一錢券ニテ一割增

發行所 東京京橋區弓町十番地 博聞雜誌社

政治經濟文學上ノ良師友

●中外法律集誌

第六號六月二十日發兌

（募益懸賞文）

本誌ハ主トシテ法律政治經濟ノ三學ニ關スルヿヲ論記スルト雖モ併セテ文學教育及ヒ其他一般ノヿヲモ掲載シ内地ハ勿論外國ニ發スル所ノ事實ト雖モ其緊要ナルモノハ凡テ掲ケ世人ニ報道センヿヲ目的トス●第五號ハ五月廿八日ニ發行シタリ其掲載目次ハ左ノ如シ

論説 正當防衛論（懸賞文）南山子稿　治外法權論（米國法律學士目賀田種太郎君稿）　**傳記** 英國大政治家グラットストン氏ノ傳（承前）　**衛生** 文明ト癲狂ノ關係　**商法** 天保年間以来ノ米價昂低表　**講義** 通俗大日本帝國憲法講義（第三回）　**法理應答** 民事制裁ノ區別如何ニ答フルノ文　應爲ノ義務ト不應爲ノ義務ノ區別及ヒ種類如何ノ問ニ答フルノ文　委托ノ定義及ヒ羅馬法ノ區別如何（英法）株券ト債券ノ差違如何（佛法）　無賃　**擬律擬判** 人ノ毛髪ヲ窃カニ挾刈シタル者ノ疑問ニ答フルノ文　犯姦罪ナルヤ否ナノ件（杞憂居士稿）　**飜譯** ストラツグルヲオルロウ　獨逸法律學士フオンイヒリン氏著　日本法律博士　鳩山和夫君誌　**官令** 法律第拾五號會計檢査院法勅令第六十七號治安裁判所出張所裁判假規程　**雜報** 民法ノ發布期ト其各篇ノ種目等外數件　**廣告** 拾餘數件

次號ヨリ万民主要民事訴訟手續現行法ト題シ明治元年ヨリ現令ニ至ル迄ノ法令規則ヲ網羅纂輯シ傍ラ各裁判所ニ於テ實際執行セラルヽ所ノ手續ヲ參酌シ之ヲ一目瞭然ナラシムル爲メ法文体ニナシ掲載ス

本誌ノ定價ハ○一冊六錢○拾貳冊前金六拾五錢○二拾四冊一圓貳拾錢○爲換ハ下谷郵便支局當テノヿ○郵券代用一錢切手ニシテ一割增○毎月二回十二日廿八日ノ兩日ニ發兌ス○全國無遞送料○見本ハ郵券一錢切手六葉御送附相成候得バ速ニ發送ス

發行所　東京府下谷區三之輪町六拾番地　三學社

繪入報知新聞

〔每月三回發兌〕

初號無代價

右第一號ハ本年六月十五日の發行にて本號ハ特に十五萬部以上印刷し全國中へ無代價にて進呈仕候に附要望の方ハ御遠慮なく至急申込あれ但し大阪市外ハ郵券壹錢送附を乞ふ

●此繪入報知ハ主として官令●學術●政治●法律●經濟●文學●宗教●衞生●教育●天文●地理●歴史●傳記●人事●統計●理化●博物●植物●技藝●農工商等に關し擇つて有益の記事論說を掲げ尚巧妙優美なる小說をも載する新聞紙なり●尚本紙の寄書ハ論說●美談●問答●文詩歌俳句●滑稽珍談等及ひ其他何の類にても速に登載し其優等の者へハ相當の報酬を呈すへし

●本紙の文章ハ極めて平容にして讀易く解し易きを旨とし且有益にして面白く近來實に無比有を見さるの好新聞紙なり仰き願くハ大方の諸君陸續愛覧の榮を給ハらんことを謹白す

●代價ハ郵稅共一部前金四錢●同上五部十九錢●同上十部三十七錢●同上廿部七十二錢●三十六部（一年分）一圓二十錢●見本ハ郵券四枚にて呈す

●廣告料ハ五號活字廿字詰一行一回前金七錢にて割引無し

●郵便爲換の取組所ハ大阪（島之郵便局の事）●郵券代用ハ一錢券にて一割增●賣捌所へハ特別割引を爲す

發行所　大阪南區千年町第四十六番屋敷　大坂新聞會社

教育發刊の廣告

學海之指針改題
六月廿五日發兌

教育雜誌を讀むもの、何ぞ獨り教育當局者に限る可けんや。父母も讀むべし、兄姉も讀むべし、議員も讀むべし、官吏も讀むべし、普通人民も讀むべし、此社會に立つ者、或は間接に或は直接に教育に關係するものは、讀まざるべからざるなり。而るに今日教育雜誌の幾百十種あるにも關らず、概ね直接なる教育家にのみ繙閲せられて、普通人民の別物視する所となるものは何ぞや、教育の未だ普及せざるに由るべしと雖も、而れども雜誌其物の缺點あるに基かずんばあらざるなり。教育は未だ果して其志を達するや否やを期す能はざれども大體にも此缺點を補ひ、以て交際を夫の社會衆多の人々に結むんと欲するなり即ち教育は、教育上に關する一切の事は、議論なり、學説なり、珍事なり、奇聞なり、網羅して遺すなからんと務むべし。然れどもかの教育雜誌の通弊ともいふべき、無味なる、乾燥なる、勃窣なる、野鄙なる、面白からざることは、務く揮掃し洗滌し去らんと欲するなり。而して教育は。彼の教育當局者に交りては歐米大家の新説を傳へ、學士博士の卓論を報じ、實歷實驗の確説を述べ、彼の父母に交りては、其子女を養育訓誡するの道を告げ、兄姉に交りては、其弟妹を待遇するの心得を説き、教育するに種子を與へ、官吏又は府縣市村の議員に交りては、教育界の眞相を述べて暗夜の燈火に供し、迷津の羅針に供し、語或は美術に渉りては美術家の侶となり、言或は文學に及べば學者の友となり、或は演劇を談じて秋夜の興を添え、小説を添りて春日の慵さを忘れしめ、以て樂み以て慰み、而して且つ大に益するに至らしめんとす。江湖の君子、冀くは愛讀の榮を給はらんことを。

第一 教育
教育上の方針及び學海中の出來事を論評す。

第二 學説
教育に係る諸學説、教育學、教育史、教授方、學校管理法、其他倫理、審美、心理、論理、哲學、及び理科に關する物理、理化學、動物學、植物學、鑛物學、地學、生理學、農業、工藝等の講義及び新論説を登載す。

第三 文藝
唱歌、音樂詩と畫等。

第四 質問
諸學科及び教科書等の事につき質疑問答をなるの欄とす。

第五 雜録
漫言、隨筆、小説、批評、遊戲等のおもしろきものを掲ぐ。

第六 雜報
教育に關する内外の新發明等を掲ぐ。

文明之母第六號目次

○文明之母
女流小說家ニ望む
○論說
女子精神的教育論……中川重麗
露國婦人の活動……ゼブリコッフ女
○家政
處女處世のかゞみ……關場不二彥
產前產後の衛生法……筑溪漁夫
日本の男子ニ注意を……志賀つゐ子
○文藝
詠人道歌……福羽美靜
行詠梅……西升子
雜のうさ……佐々木信綱
竹取物語講義……琴條女史
秋之夜洒漫筆……内田遠湖 鐵筆將軍 合評
○小說
水仙花……鐵筆將軍
○批評
皇朝記事文䇳○群芳新譜○晩春樂
○さゝさま○批評家困難
○雜錄ナポレオンの皇后ジヨセフン（菅野豊）折焚柴の記ふつきて（衛遠樓主人）貞操を美風ニ盡してよ（雲通路大夫）和歌の和の字（近藤芳樹）北條氏康文材
○彙報數件 ○附錄 刺客 鐵筆將軍

【遞信省認可】 明治廿二年六月十五日發兌

文明之母第七號目次

社說 スペンサー氏女權說の評論第四
論說 繪画博覽會論……ハリソン
母の務……中川重麗
文藝
詠史十二首……村上正雄
楠公三首……町原熙麿
雜のうた……岩江かほる子
I DREAM'D A DREAM OF AN OLD, OLD LOVE……W. W. MARTIN
雨の記……白河樂翁
竹取翁物語講義……琴條女史
小說
よしの川……鴨立庵主人
劣夫傑女譚……山縣悌三郎
批評
日本華文○お八重○色懺悔○學校家庭遊戲全書○國の基○日本文學○自笑粹誌
雜錄
寶物取調ニ就て北所見……川田剛
コルセツトの來歷……蠡湖漁史
コルセツトニ競さて……鈍洒風流士
佳人の爪と其性質……雲通路大夫
少年子記者ニ答ふ……鐵筆將軍
批評せらるゝも難し○お輕と園十郎○婦人慈善會及の忠告彙報數件廣告數件